

577

577

577

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

割山遺跡 (第4次)

川町史

577

1985.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

わり やま い せき

割 山 遺 跡 (第4次)

1985.3

深谷市教育委員会

序

緑豊かな自然環境に恵まれた深谷市でも、近年になって急速に都市化が進行してまいりました。住宅も増加し、現在人口は約8万8千人、昭和65年には10万人を越えるものと推定されます。深谷市では、市民のみなさまの御要望にお答えするべく、「緑に囲まれた、生活、生産環境の整った都市」づくりに努力しております。

市内でも、特に住宅の増加が著しい上野台地区には、多くの重要な遺跡があります。埴輪窯跡などで知られる割山遺跡もその一つです。割山遺跡は、昭和37年、53年、56年の3回にわたり発掘調査が実施され、貴重な成果を収めました。このたび、割山遺跡地内に住宅の建設を予定している、今井昭二氏の深い御理解と積極的な御協力により、第4次発掘調査を実施いたしました。本書はその成果をまとめたものです。ここに、郷土の歴史の一端を、記録保存するとともに御紹介できましたことは、誠に今井氏の御厚意によるものであり、心から深く感謝いたします。

郷土の歴史の生きた証明である埋蔵文化財を保護し、後世に伝えていくことは、私たちの責務であります。こうした文化的な事業は、行政関係者だけで成し遂げることは不可能であり、今後とも市民のみなさまの暖い御協力を賜われますよう、お願い申し上げます。

おわりに、発掘調査にあたり、大変お世話になりました関係者のみなさまや地元のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

深谷市教育委員会

教育長 鳥塚 恵和男

例 言

1. 本書は、個人住宅の建築に伴う、埼玉県深谷市上野台字割山2941番1号所在遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年度事業として、国及び県の補助金の交付を受け、深谷市教育委員会が主体となり実施した。現地発掘期間は昭和59年12月5日～12月25日で、調査面積は約600㎡である。
3. 本書の執筆・編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。
4. 出土品の整理及び図版の作成等は整理参加者全員で行った。なお、図版中の北は座標北を示している。
5. 出土品は、深谷市教育委員会が保管している。
6. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御助言を賜った。
井上肇、今井宏、小川望、小俣悟、笹森健一、寺社下博、中村倉司、坂東隆秀、大和修

発掘調査の組織

調査主体者 深谷市教育委員会 教育長 鳥塚恵和男
調査担当者 深谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主事 澤出晃越
調査補助員 鈴木靖夫、田中秀逸
調査参加者 井上純子、大浜慶子、加藤佳子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、柴崎侑子、砂田伊久子、都築百合子、福田寛子、細川ケイ子、松本みづ江、水野祥代、本橋玲子、森光代、湯沢直子、渡辺哲子
事務局 深谷市教育委員会社会教育課 課長 武井克己
課長補佐兼文化財保護係長
河田記久平
主事 大屋貞夫、小林京子

目 次

序	
例言	
目次	
I. 発掘調査に至る経過	1
II. 遺跡の地理的・歴史的環境	1
III. 調査の概要	2
IV. 遺構と出土遺物	8
V. 結 語	27

写真図版

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)	第13図 井戸跡出土遺物(4) 溝状遺構出土遺物(1) (1/3)
第2図 調査区周辺地形図 (1/10,000)	第14図 溝状遺構出土遺物(2) (1/4)
第3図 調査区位置図 (1/400)	第15図 溝状遺構出土遺物(3) (1/3)
第4図 調査区全測図 (1/150)	第16図 溝状遺構出土遺物(4) (1/4・1/3)
第5図 土層断面図(1) (1/40)	第17図 溝状遺構出土遺物(5) 埋没谷出土遺物(1) (1/3)
第6図 土層断面図(2) (1/40)	第18図 井戸跡及び溝状遺構出土古銭(1/2)
第7図 土層断面図(3) (1/40・1/80)	第19図 表面採集遺物(1/3)
第8図 第1号土坑・第1号溝状遺構遺物出土状態 (1/30)	第20図 板石塔婆・埴輪・石斧(1/3)
第9図 土坑出土遺物(1/3・1/2)	第21図 縄文土器及び埴輪(1/3)
第10図 井戸跡出土遺物(1) (1/3)	第22図 溝状遺構位置関係図(1/600)
第11図 井戸跡出土遺物(2) (1/3)	
第12図 井戸跡出土遺物(3) (1/3)	

写真図版目次

図版1 1. 調査区全景(南より)	図版4 7. 出土遺物(1)
2. 調査区全景(南西より)	図版5 8. 出土遺物(2)
図版2 3. 調査風景(北西より)	図版6 9. 出土遺物(3)
4. 第3号溝状遺構・第3号井戸跡土層	
図版3 5. 第4号井戸跡	
6. 遺物出土状態	



- | | | | | |
|--------------|------------|----------|-------------|------------|
| 1. 割山遺跡 | 2. 内ヶ島氏館跡 | 3. 上敷免遺跡 | 4. 皿沼城跡 | 5. 伝幡羅太郎館跡 |
| 6. 東方城跡 | 7. 木の木古墳群 | 8. 片鼻和館跡 | 9. 深谷城跡 | 10. 深谷町遺跡 |
| 11. 大沼弾正忠屋敷跡 | 12. 桜田馬場 | 13. 曲田城跡 | 14. 桜ヶ丘組石遺跡 | 15. 秋元氏館跡 |
| 16. 小台遺跡 | 17. 萱場松原遺跡 | 18. 鼠裏遺跡 | 19. 出口遺跡 | 20. 島之上遺跡 |
| 21. 前畠遺跡 | 22. 人見館跡 | | | |

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)

I. 発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を隔てて群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正2年(1456)に上杉房憲が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約88,000人、面積約70km²で、農業生産高は県内随一を誇り、工業団地の形成・宅地の増加など急速に都市化が進行している。

昭和37年10月、深谷市上野台字割山で深谷商業高等学校地歴部が円筒埴輪を発見した。さっそくその年の11月21日～24日に、柳田敏司氏、小沢国平氏の担当により上野台字割山2843番の発掘調査が実施され、埴輪窯跡が確認された(註1)。昭和53年9月12日～11月30日には、都市計画街路南大通り線の建設に伴い、今泉泰之氏、大和修氏の担当により約3,000m²の発掘調査が実施された(註2)。この調査では、東側のA区で埴輪窯跡が検出され、浅い谷を挟んで西側のB区・C区では中世の館の堀跡と思われる溝状遺構が検出された。この時には重要な生活道路となっている2ヶ所の調査は見合わされたが、その部分の調査は、昭和56年2月12日～3月5日に今泉泰之氏の担当により実施された(註3)。更に昭和56年6月16日～10月15日には、都市計画街路南大通り線の延長に伴い、割山遺跡に西接する鼠裏遺跡の発掘調査が実施された(註4)。

さて、近年住宅が急増している深谷市でも、駅に至近な台地上である上野台は、特に住宅の増加が著しい。昭和58年11月、割山遺跡第2次発掘調査B区の南側にあたる上野台2941番1号に、昭和60年に住宅が建築される予定であることが明らかになった。土地所有者の今井昭二氏は、割山遺跡の重要性を充分理解されており、事前に発掘調査を実施することを快く承諾された。そこで市教育委員会は、昭和59年度に国と県の補助を得て発掘調査を行うことを計画し、準備を進めた。昭和59年6月28日付けの文書により国庫補助金交付の決定が通知され、今井氏と協議のうえ、昭和59年12月に発掘調査が実施されることになった。上記の経過から、調査の名称は割山遺跡第4次発掘調査とした。

註1 小沢国平 「割山埴輪窯跡」 昭和39年3月 深谷市教育委員会

註2 今泉泰之・大和修他 「割山遺跡」 昭和56年3月 深谷市割山遺跡調査会

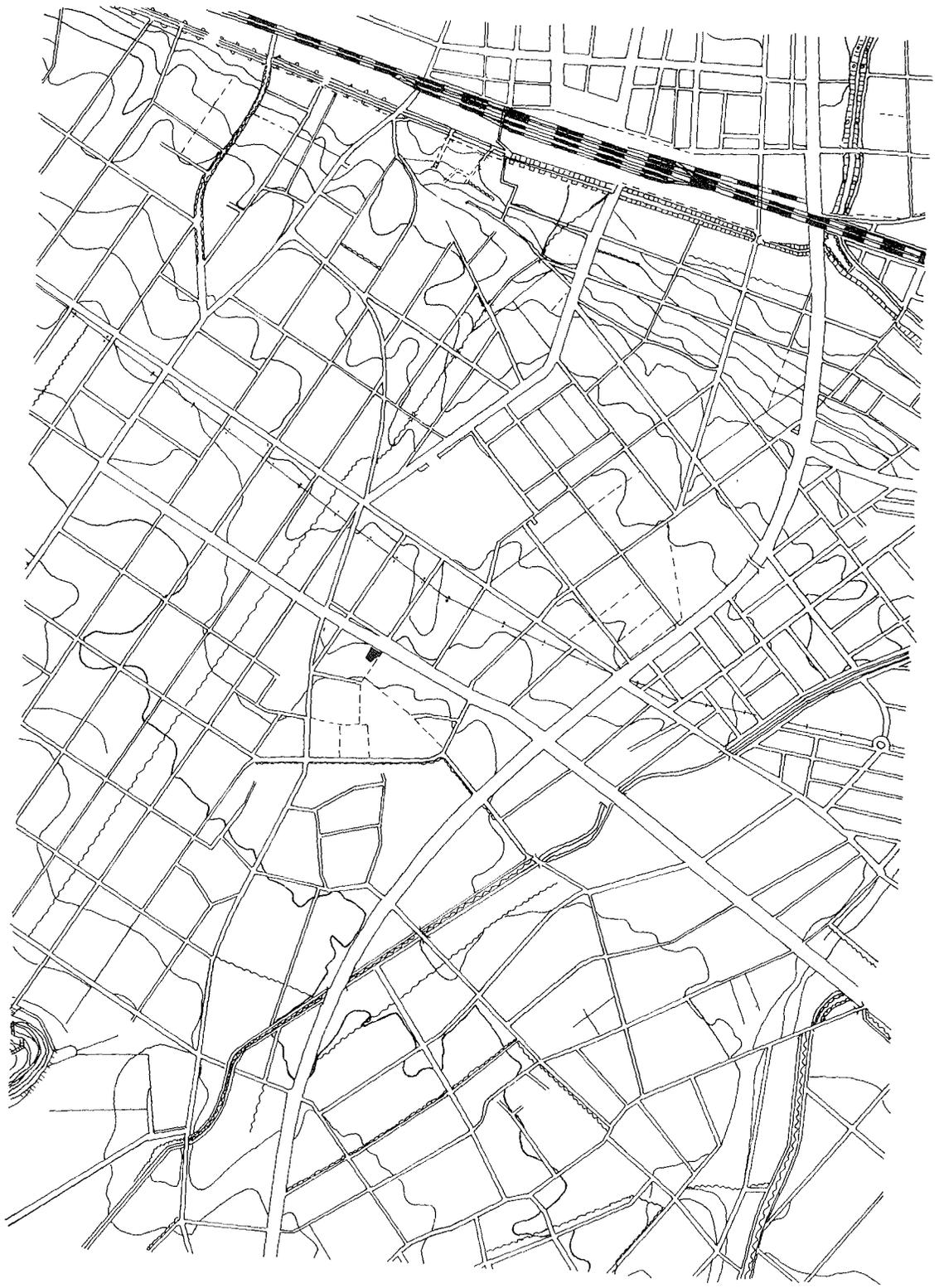
註3 今泉泰之他 「割山遺跡(第3次)」 昭和57年2月 深谷市教育委員会

註4 澤出晃越 「鼠裏遺跡」 昭和58年3月 深谷市教育委員会

II. 遺跡の地理的・歴史的環境

深谷市の地形を概観すると、ほぼ東西に走る国鉄高崎線を境界として、南半を占める榎挽台地と北半を占める妻沼低地に二分される。榎挽台地は、荒川的作用により形成された寄居付近を扇頂として北へ広がる洪積扇状台地であり、妻沼低地は、利根川的作用により形成された沖積低地である。

榎挽台地は、西側の武蔵野面に比定される榎挽面(榎挽段丘)と、東側の立川面に比定される寄



第2図 調査区周辺地形図 (1/10,000)

居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼ高崎線沿いの崖線で、比高5～20mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高2～5mをもって妻沼低地と接している。台地と低地の境界線付近の標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～35m、妻沼低地が30～35mである。なお、櫛挽面の北東端近くに、標高98.0mの第三紀層から成る残丘の仙元山があり、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近には活断層である深谷断層が確認されている。

割山遺跡は、深谷市上野台字割山2941番他、国鉄高崎線深谷駅の南約0.8kmにある。櫛挽台地櫛挽面の北端部にあたり、標高は約56mである、櫛挽面上の遺跡は、上唐沢川・押切川・戸田川・唐沢川などにより南北に開析された谷筋に数多く分布している。古墳時代以降の遺跡も決して少なくはないが、縄文時代中期～後期初頭にかけての遺跡が多いことが目立つ。こうした状況は、いわゆる扇端湧水と深く係わっているものと考えられる（註1）。

妻沼低地内の自然堤防上には、古墳時代後期以降の遺跡が密集している。これは、稲作を中心とした当時の生産様式によるものと理解できる。櫛挽台地寄居面北端部、妻沼低地を見おろす台地上には木の本古墳群があり、現在は小円墳10数基が残っている。

深谷市内の中世館跡としては、櫛挽面上の人見館跡、秋元氏館跡、寄居面北端部上の序鼻和城跡、東方城跡、伝幡羅太郎館跡、妻沼低地上の深谷城跡、大沼弾正忠屋敷跡、桜田馬場、曲田城跡、皿沼城跡などが挙げられる。

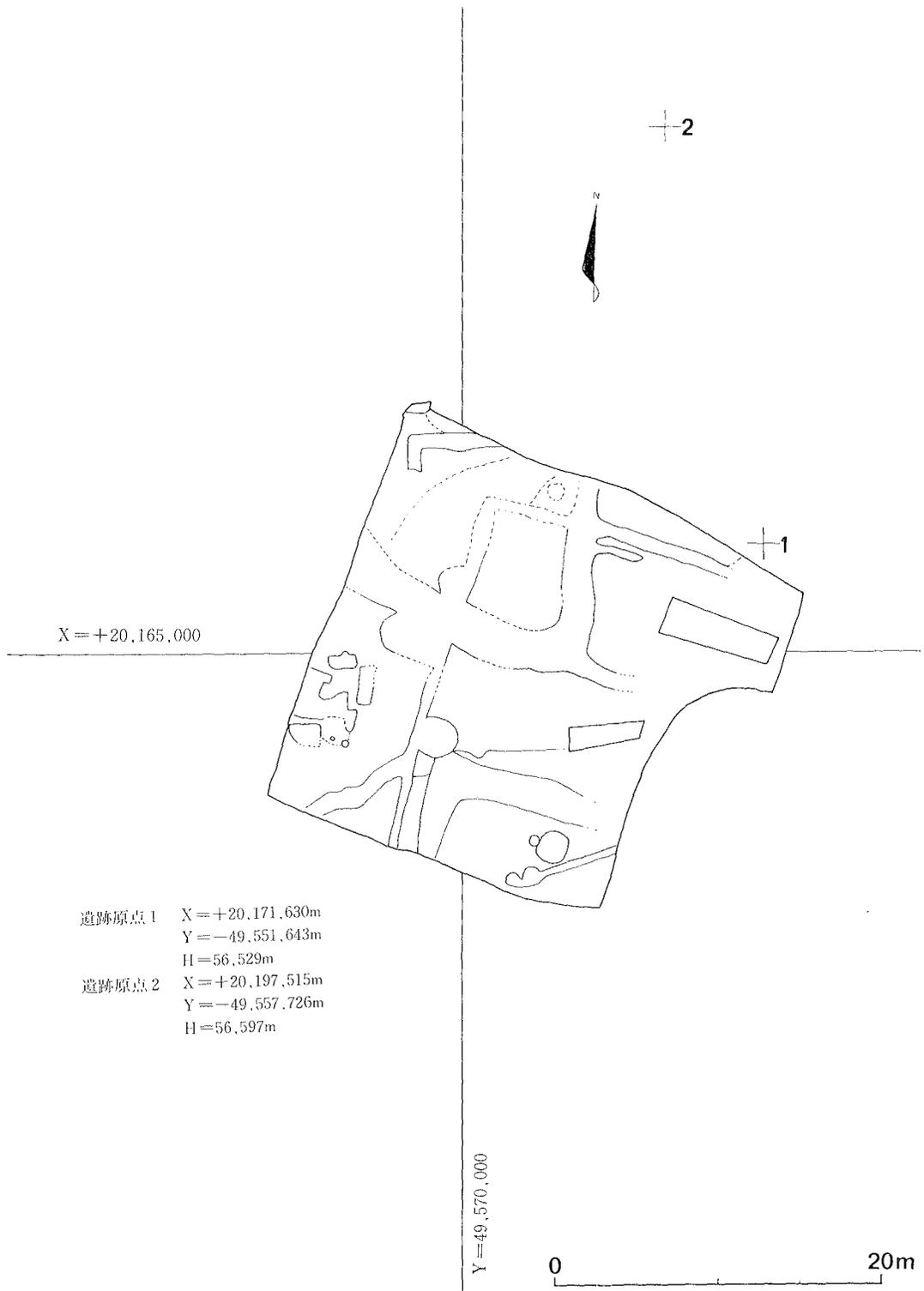
註1 柿沼幹夫 「Ⅱ．立地と環境」 埼玉県遺跡発掘調査報告第12集「前畠・出口・島之上・芝山」所収 昭和52年3月 埼玉県教育委員会

Ⅲ．調査の概要

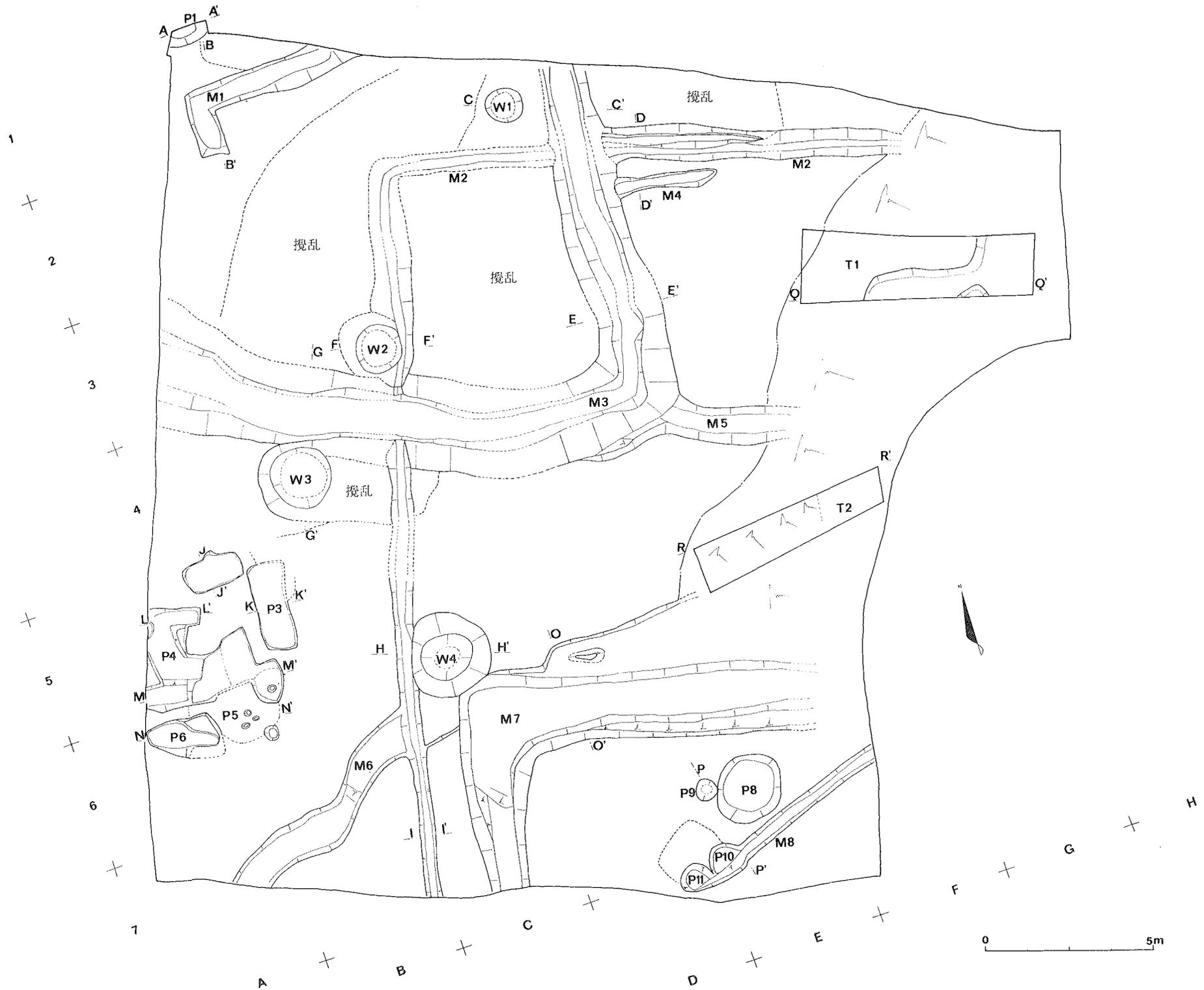
昭和59年12月5日、重機による表土の削除から調査を開始した。昭和53年の第2次発掘調査の際に設定された遺跡原点を利用して、方位を座標北に揃えた4m区画のグリッドを設定し、グリッドは北から南へ数字を、西から東へアルファベットを付して呼称した。

耕作等による攪乱が激しく、当初は遺構の確認に手間取ったが、12月13日に第2次発掘調査で検出された溝状遺構の続きである第3号溝状遺構を確認してからは、調査は比較的スムーズに進展した。調査期間中、前半は比較的温暖な日が続いたが、後半は寒い日が続き、特に午前中は霜柱に悩まされた。調査区東側の埋没谷は、2条のトレンチを設定して調査を行った。12月26日、全景写真を撮影し、現地調査を終了した。

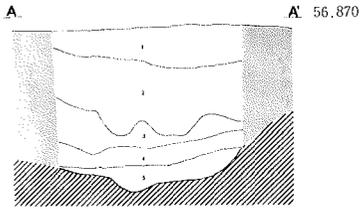
検出された遺構は土壇10基、井戸跡4基、溝状遺構8条である。古墳時代の遺構は土壇1基のみで、土師器甕4点（うち完形2点）が出土した。井戸跡は4基とも中世の遺構と考えられる。溝状遺構は中～近世の遺構と考えられ、特に第3号溝状遺構は館の堀跡である可能性が高い。中～近世の遺物としては、土器片、陶磁器片、瓦塔破片、板石塔婆片、古銭、石臼（茶臼）などがある。また、埴輪窯跡に隣接しているため、埴輪片も約20点ほど出土した。



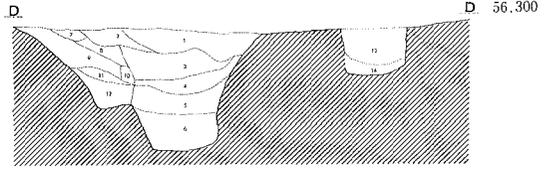
第3図 調査区位置図 (1/400)



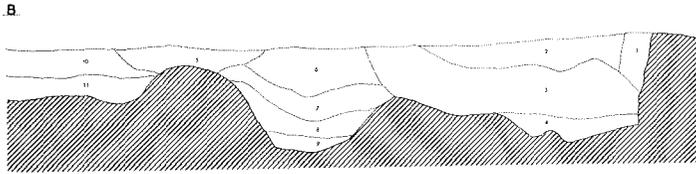
第4図 調査区全測図 (1/150)



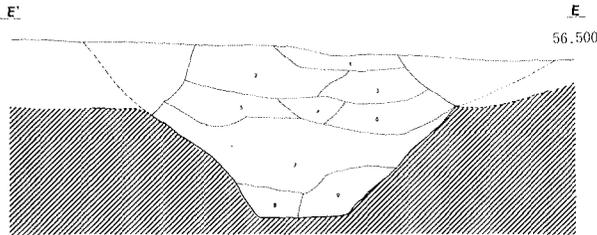
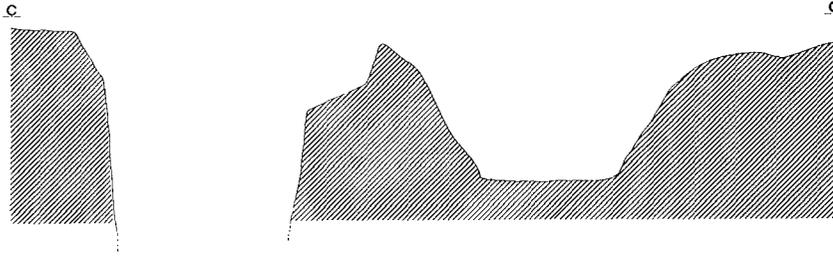
1. 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。攪乱。
2. 暗褐色土
3. 黒色土
4. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
5. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。



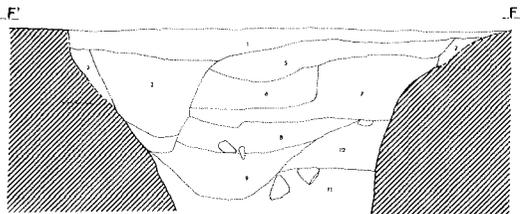
1. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。
 2. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
 3. 暗褐色土
 4. 明褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
 5. 暗褐色土 3より暗い。しまり悪い。
 6. 暗褐色土 3より暗く、5より明るい。しまり悪い。
 7. 攪乱
 8. 明褐色土
 9. 明褐色土 8より暗い。
 10. 黒褐色土 キメ粗い砂を多量に含む。
 11. 暗褐色土 キメ粗い砂を多量に含む。
 12. 黒褐色土 10より明るい。
 13. 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
 14. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。
- ※10・11. は天明年間の浅間山噴火の際の砂と思われる。



1. 黒褐色土 ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
3. 暗褐色土 2より明るい。
4. 暗褐色土 3より暗く、2に近しい。ローム粒子を含む。
5. 明褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
6. 明褐色土 5より暗い。
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土 7より暗い。ローム粒子・ブロックを含む。
9. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
10. 黒褐色土 ローム粒子を含む。
11. 黒褐色土 10より暗い。ローム粒子・ブロックを含む。



1. 暗褐色土
2. 明褐色土
1. 暗褐色土
2. 明褐色土
3. 暗褐色土 1より明るい。
4. 明褐色土 2より暗い。
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土 3より暗い。5より明るい。
7. 暗灰色土 ローム粒子をわずかに含む。粘性強い。
9. 黒灰色土 ローム粒子を少量含む。



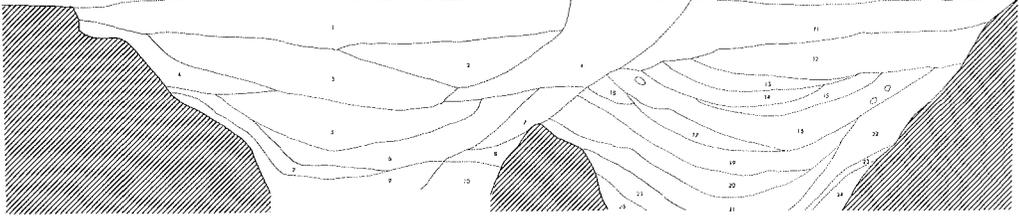
1. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。6より暗い。
6. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。3・4より暗い。
7. 明褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。粘性強い。
8. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。
9. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。
10. 暗褐色土 ローム粒子を含む。粘性強い。
11. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。

0 1m

第5図 土層断面図(1) (1/40)

G

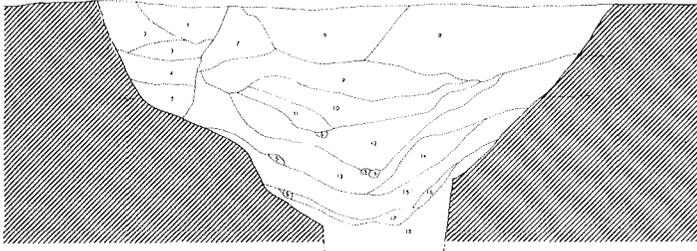
56.435 G



- | | | | |
|----------|----------------------------|----------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒子をわずかに含む。 | 14. 黄褐色土 | ローム粒子・粘土質のブロックを多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 1より明るい。 | 15. 黒褐色土 | ローム粒子を少量含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 2より明るい。 | 16. 黒灰色土 | ローム粒子をわずかに含む。粘性強く、しまり良い。 |
| 4. 暗褐色土 | 1より暗い。ローム粒子をわずかに含む。 | 17. 明褐色土 | ローム粒子・ブロックを多く含む。粘性強く、しまり良い。 |
| 5. 黒褐色土 | | 18. 黄褐色土 | ローム粒子・粘土質のブロックを多量に含む。しまり良い。 |
| 6. 黒褐色土 | 5より暗い。ローム粒子をわずかに含む。 | 19. 暗褐色土 | ローム粒子・ブロックを多く含む。 |
| 7. 暗褐色土 | ローム粒子・ブロックを少量含む。 | 20. 暗褐色土 | 19より暗い。ローム粒子・ブロックを含む。 |
| 8. 黒褐色土 | 6より暗い。ローム粒子をわずかに含む。 | 21. 明褐色土 | ロームブロックを含む。全体にローム粘土質である。 |
| 9. 黒褐色土 | 8より明るい。ローム粒子をわずかに含む。 | 22. 暗褐色土 | ローム粒子・ブロックを含む。 |
| 10. 黒褐色土 | 9より暗い。8に似る。ローム粒子を少量含む。 | 23. 黒褐色土 | ローム粒子・ブロックを含む。 |
| 11. 暗褐色土 | 4より明るい。ローム粒子・ブロックを含む。 | 24. 黄褐色土 | ローム、粘性強く、しまり悪い。 |
| 12. 暗褐色土 | 11より明るい。ローム粒子・ブロックをやや多く含む。 | 25. 黒褐色土 | ローム粒子・ブロックを含む。 |
| 13. 暗褐色土 | 12より明るい。ローム粒子・ブロックを含む。 | 26. 暗褐色土 | ローム粒子を含む。 |

H

H 56.500



- | | | | |
|---------|--------------------------|----------|--------------------------------|
| 1. 暗褐色土 | | 10. 明褐色土 | ローム粒子・ブロック・黄白色粘土粒子・ブロックを多く含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 1より明るい。 | 11. 黄褐色土 | ローム粒子・ブロックを多量に含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒子を含む。 | 12. 暗灰色土 | ローム粒子・ブロックをわずかに、黒色土粒子を含む。粘性強い。 |
| 4. 暗褐色土 | 2・3より暗い。ローム粒子をわずかに含む。 | 13. 暗褐色土 | ローム粒子を少量含む。粘性強い。 |
| 5. 暗褐色土 | 4より暗い。 | 14. 暗褐色土 | |
| 6. 暗褐色土 | ローム粒子を少量、黒色土粒子を含む。 | 15. 灰褐色土 | 粘性強い。 |
| 7. 明褐色土 | ローム粒子・ブロック・黒色土粒子を含む。 | 16. 褐色土 | ローム粒子を多量に含む。粘性ローム質で赤っぽい。 |
| 8. 黒褐色土 | ローム粒子・ブロック・黒褐色と暗褐色が常降状。 | 17. 灰褐色土 | 粘土質。 |
| 9. 明褐色土 | 7より暗い。ローム粒子・ブロック・黒色土を含む。 | | ローム粒子を多量に含む。粘性ローム質で赤っぽい。 |

J

J 56.500



1. 黒褐色土 ローム粒子を含む。

K

K 56.500



1. 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。

L

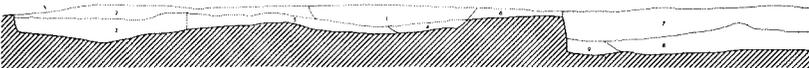
L 56.500



1. 暗褐色土
2. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土 ローム及び黄白色粒子・ブロックを含む。
4. 黒褐色土 ローム粒子をわずかに含む。3・4より暗い。
5. 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。3・4より明るい。
※粒子・ブロックはローム及び黄白色粘土質ローム

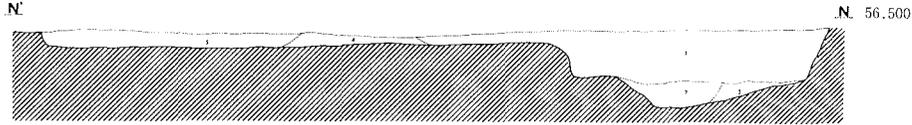
M

M 56.500

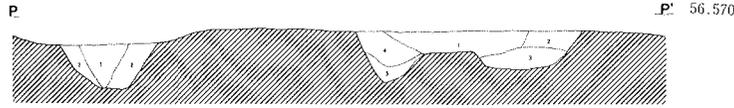


- | | | | |
|------------|-------------------|---------|--------------------------|
| 1. 暗褐色土 | | 6. 明褐色土 | ローム粒子を多く含む。 |
| 2. 黒褐色土 | ローム粒子をわずかに含む。 | 7. 暗褐色土 | ローム粒子・ブロックを多く含む。 |
| 3. 黒褐色土 | 2より暗い。ローム粒子を少量含む。 | 8. 明褐色土 | ローム粒子・ブロックを多く含む。 |
| 4. 明褐色土 | ローム粒子を含む。しまり悪い。 | 9. 暗褐色土 | ローム粒子・ブロックを少量含む。 |
| 5. ソフトローム。 | | | ※粒子・ブロックはローム及び黄白色粘土質ローム。 |

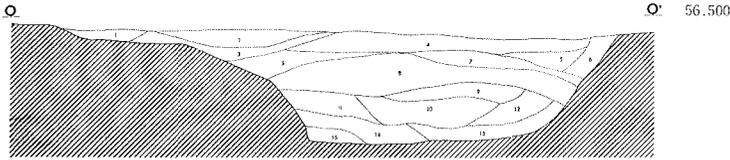
第6図 土層断面図(2) (1/40)



- | | |
|---------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックをわずかに含む。 | 4. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。粘性強く、しまり悪い。 |
| 2. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 | 5. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 |
| 3. 黄白褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。粘性強い。 | ※粒子・ブロックはローム及び黄白色粘土。 |

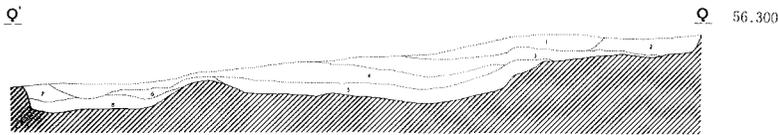


- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土 ローム粒子を含む。 | 1. 黒褐色土 焼土粒・ブロックを多く含む。 |
| 2. 明褐色土 ローム粒子を含む。 | 2. 黒褐色土 焼土粒子わずかに、ロームブロックを含む。 |
| | 3. 暗褐色土 ローム粒子を含む。 |
| | 4. 暗褐色土 ローム粒子を含む。 |
| | 5. 明褐色土 ローム粒子を多く含む。 |

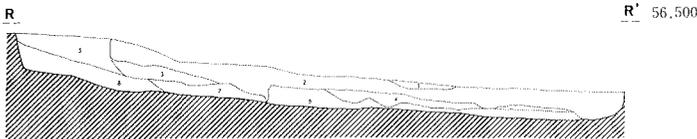


- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。 | 9. 暗褐色土 8より明るい。 |
| 2. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 | 10. 暗褐色土 8より暗い、灰色を帯びる。粘性強い。 |
| 3. 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。 | 11. 暗褐色土 8・10より明るい。しまり悪い。 |
| 4. 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。 | 12. 暗褐色土 11. に似る。ローム粒子をわずかに含む。しまり悪い。 |
| 5. 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に含む。 | 13. 暗褐色土 10・12より明るい。ローム粒子をわずかに含む。粘性強く、しまり悪い。 |
| 6. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 | 14. 明褐色土 ローム粒子を含む。粘性強く、しまり悪い。 |
| 7. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを少量含む。6より明るい。 | 15. 明褐色土 ローム粒子を多く含む。粘性強く、しまり悪い。 |
| 8. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックをわずかに含む。6より暗い。 | ※ローム粒子はやや黄白色、粘土質。 |

0 1m



- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 | 5. 黒色土 4より暗い。石を含む。 |
| 2. 黒色土 | 6. 黒色土 5より明るい。 |
| 3. 黒褐色土 1より明るい。 | 7. 黒色土 ローム粉子を少量含む。 |
| 4. 黒色土 ローム粒子をわずかに含む。 | 8. 黒灰色土 ローム粘土・粒子、及びブロックを含む。 |



- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1. 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。 | 5. 暗褐色土 ローム粒子・ブロック・黒色土粒子を含む。 |
| 2. 黒色土 泥炭質。 | 6. 暗灰褐色土 ロームブロック・粒子・黒色土粒子・灰色粒子を含む。 |
| 3. 黒色土 泥炭質。ローム粉子・ブロックを含む。2より明るい。 | 7. 暗灰褐色土 6より黄色い。 |
| 4. 黒色土 泥炭質。ローム粒子・ブロックを含む。2より明るい。 | 8. 黄褐色土 ロームブロック・粒子・灰色粘土を含む。 |

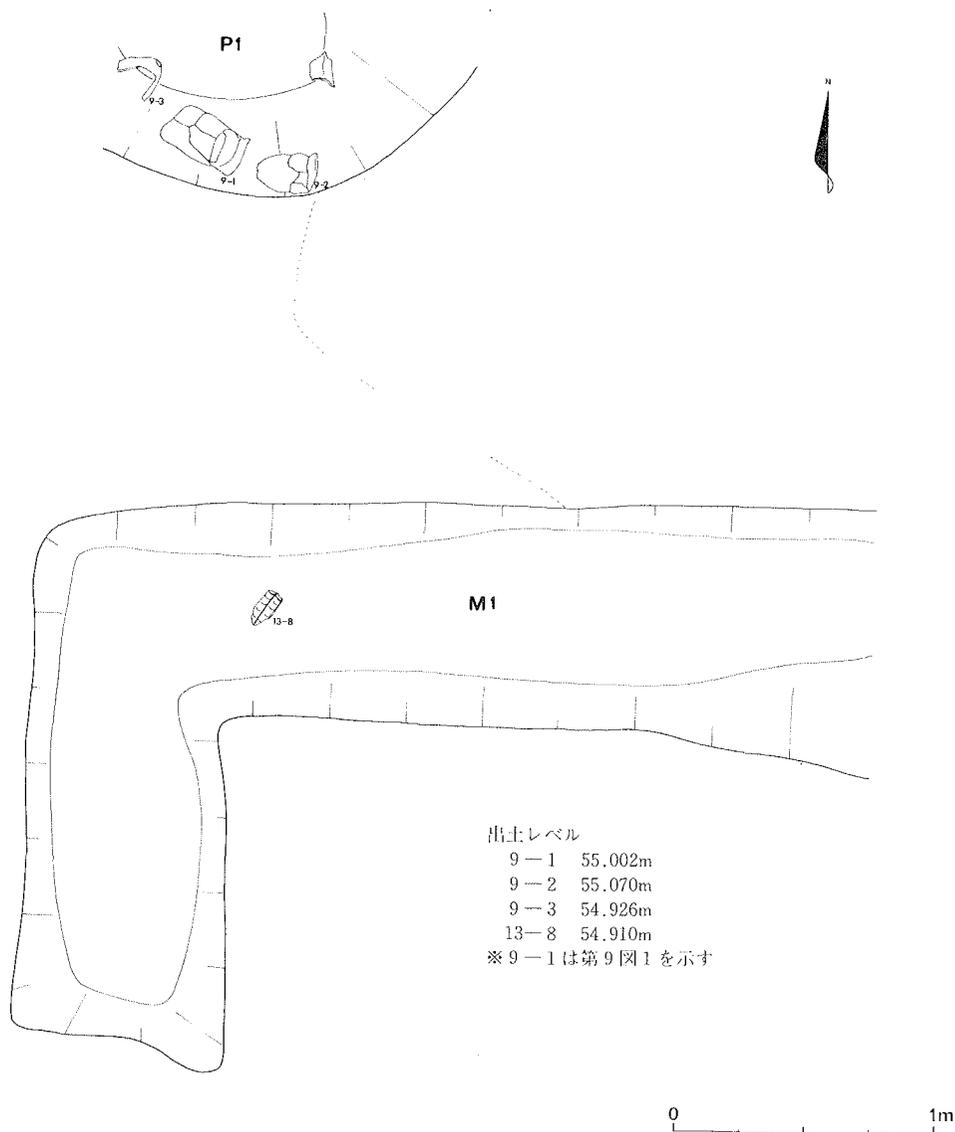
0 2m

第7図 土層断面図(3) (1/40・1/80)

Ⅲ．遺構と出土遺物

1. 土坑

- 第1号土坑 調査区北西隅に位置する。深さは約80cmほどだが、全掘できなかったため形状は明確ではない。上層は攪乱を受けており、底はやや凹凸がある。土師器甕などが出土した。
- 第2号土坑 5-Bグリッドに位置する。1.7m×1.0mの隅丸の長方形を呈し、深さは約50cmで、底は平坦である。出土遺物はない。
- 第3号土坑 5-Bグリッドに位置する。攪乱のため明確ではないが、2.2m×1.0mほどの長方形を呈していたものと思われる。深さは約60cmで、底は平坦である。出土遺物はない。
- 第4号土坑 5-A・Bグリッドに位置する。土坑6基以上の切り合いと思われ、形状は明確



第8図 第1号土坑・第1号溝状遺構遺物出土状態 (1/30)

ではない。深さは最も深い部分で約40cmだが、切り合いに応じて段差が認められる。遺物はない。

○第5号土坑 5-Bグリッド、第4号土坑の南側にある浅い落ち込みである。径20cm、深さ20cmほどの小ピットが3基と、径50cm、深さ30cmほどのピットがからんでいる。出土遺物はない。

○第6号土坑 6-Aグリッド、第4号土坑の南側に位置する。2.4m×1.4mほどの不整形を呈するが、攪乱のためはっきりしない。深さは約40cmで、北東隅にテラス状の部分をも有し、底はやや凹凸がある。出土遺物はない。

○第8号土坑 7・8-Eグリッドに位置する。2.2m×2.0mの不整形を呈し、深さは約30cmである。覆土は黒色土で、底は平坦である。古銭3枚が出土した。

○第9号土坑 第8号土坑の西に接する径0.5mの小土坑である。擂鉢状を呈し、深さは約20cmで、覆土には焼土が多く混入していた。出土遺物はない。

○第10号土坑 8-Eグリッドに位置し、第8号溝状遺構に切られている。1.0m×0.7mほどの長円形状を呈していたものと思われ、深さは約25cmである。

○第11号土坑 第10号土坑の西に接する径1.0m、深さ約10cmの浅い落ち込みで、遺物はない。

土坑出土遺物 (第9図)

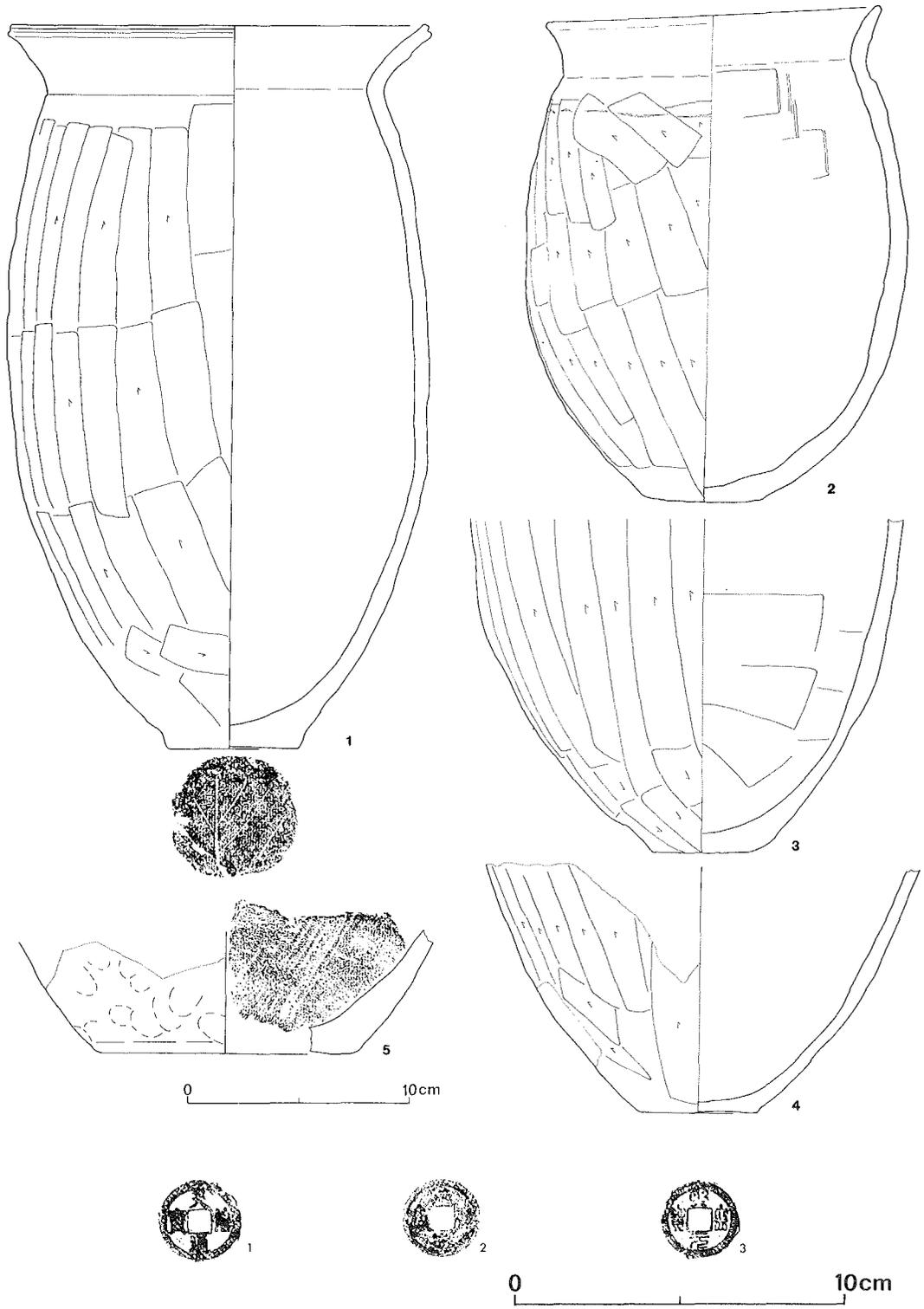
1～5は第1号土坑から出土した。1～4は土師器甕である。1は、口径19.0cm、胴径19.2cm、底径6.0cm、器高33.3cmで長胴化している。口縁部は外反し、口唇部外面は平坦にナデられて沈線が巡る。胴部外面は縦位のヘラ削りで、内面は剝離が激しく明瞭ではないが、横位によくナデられていたようである。底面に木葉痕がみられる。胎土砂を含み、焼成良好、口縁部周辺は黄白色～淡褐色、それ以下は暗褐色を呈する。完形。2は、口径15.0cm、胴径17.2cm、底径4.6cm、器高21.3cm、やや小形の甕である。口唇部は丸く、短い口縁部は少し外反し、頸部の屈曲は弱い。底は小さく、やや丸い。外面頸部直下に輪積み痕が明瞭。胴部内面は横位によくナデられており、特に上位にはヘラナデ痕が明瞭。胎土砂を含み、焼成良好、暗褐色～淡褐色を呈する。完形。3は、底径5.0cm、残存高15.5cm、下半の約4/5が残っていた。外面は縦位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデ。胴部外面中位に炭化物顕著に付着。胎土砂を多く含み、焼成良好、暗褐色を呈する。4は、底径5.4cm、残存高11.3cm、下半の約1/2が残っていた。外面縦位のヘラ削り、内面は剝離が激しい。底面は削られている。胎土砂を含み、焼成良好、淡褐色を呈する。5は瓦質の擂鉢の底部破片で、攪乱により流れ込んだものであろう。ロクロ調整で、外面に指の押圧痕が認められる。底面の調整は不明。胎土砂を含み、焼成やや不良、内面黒褐色、外面灰褐色を呈する。

・6～8の古銭は第8号土坑から出土した。6は真書の天禧通宝(北宋、初鑄1017年)、7は腐食が激しいが、行書の元祐通宝(北宋、初鑄1086年)であろう。8は、篆書の熙寧元宝(北宋、初鑄1068年)である。6(表)・7(表)・8(裏)の状態で、3枚貼り付いて出土した。

2. 井戸跡

井戸跡は計4基検出されたが、地下水の湧出のため、全て底の確認は断念せざるをえなかった。

○第1号井戸跡 2-Eグリッドに位置する。上半は攪乱のため形態は不明だが、ロート状を呈



第9図 土壇出土遺物 (1/3・1/2)

していたものと思われる。下位は径約1.0mほどの円形を呈する。常滑鉢などの中世遺物や土師器などが出土した。

○第2号井戸跡　　3-Cグリッドに位置し、第2号溝状遺構、第3号溝状遺構に切られている。確認面で径2.0m、下位では径1.2mほどのロート状を呈する。播鉢、土師器などが出土した。

○第3号井戸跡　　4-B・Cグリッドに位置し、第3号溝状遺構に切られている。確認面での径3.0m、下位での径1.3mほどのロート状を呈する。青磁皿などが出土した。

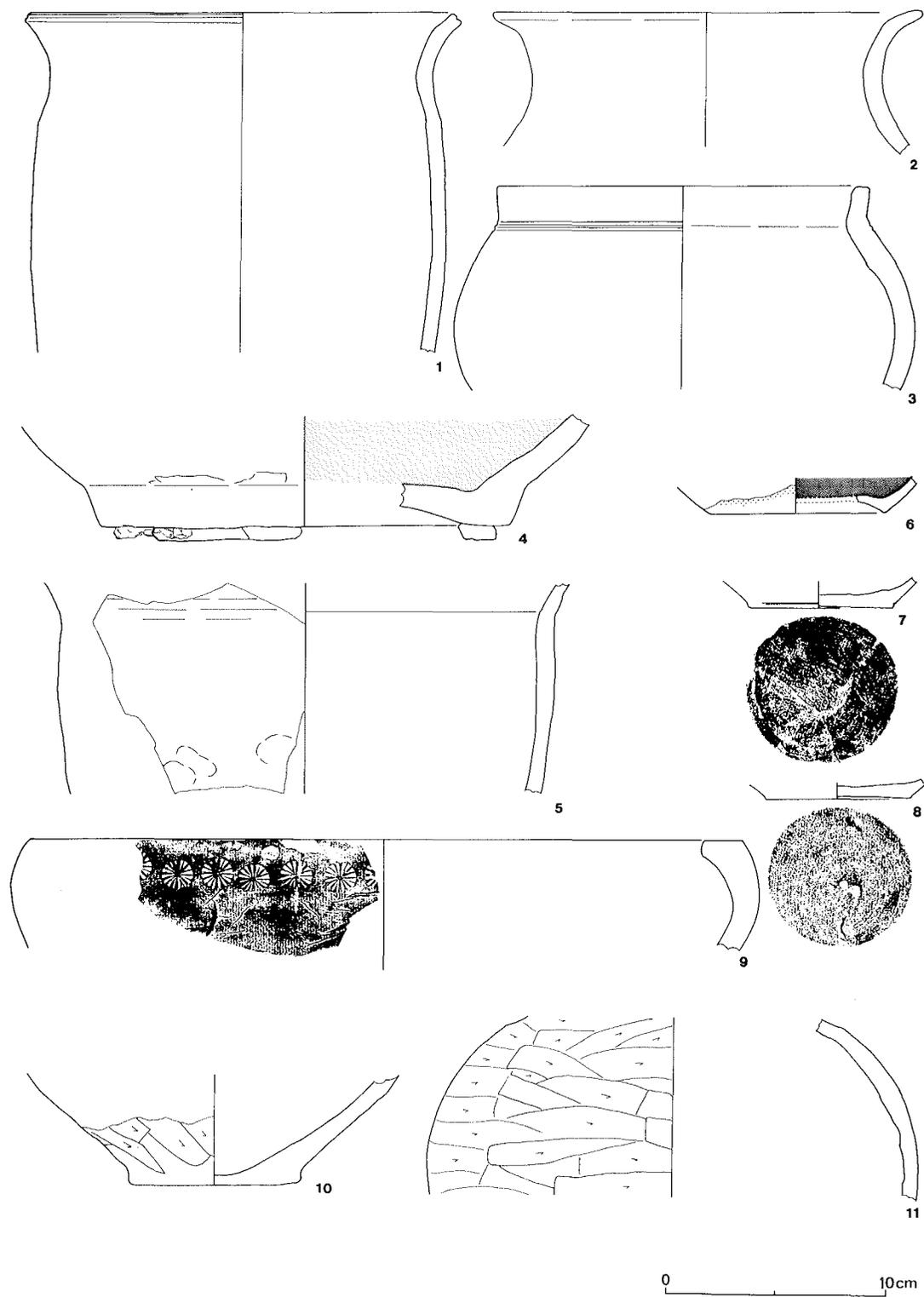
○第4号井戸跡　　6-Cグリッドに位置し、第2号溝状遺構、第6号溝状遺構などに切られている。確認面での径2.7m、下位での径0.6mほどのロート状を呈する。土師質皿などが出土した。

なお、上記の井戸跡の壁には、石などは全く貼られていなかった。

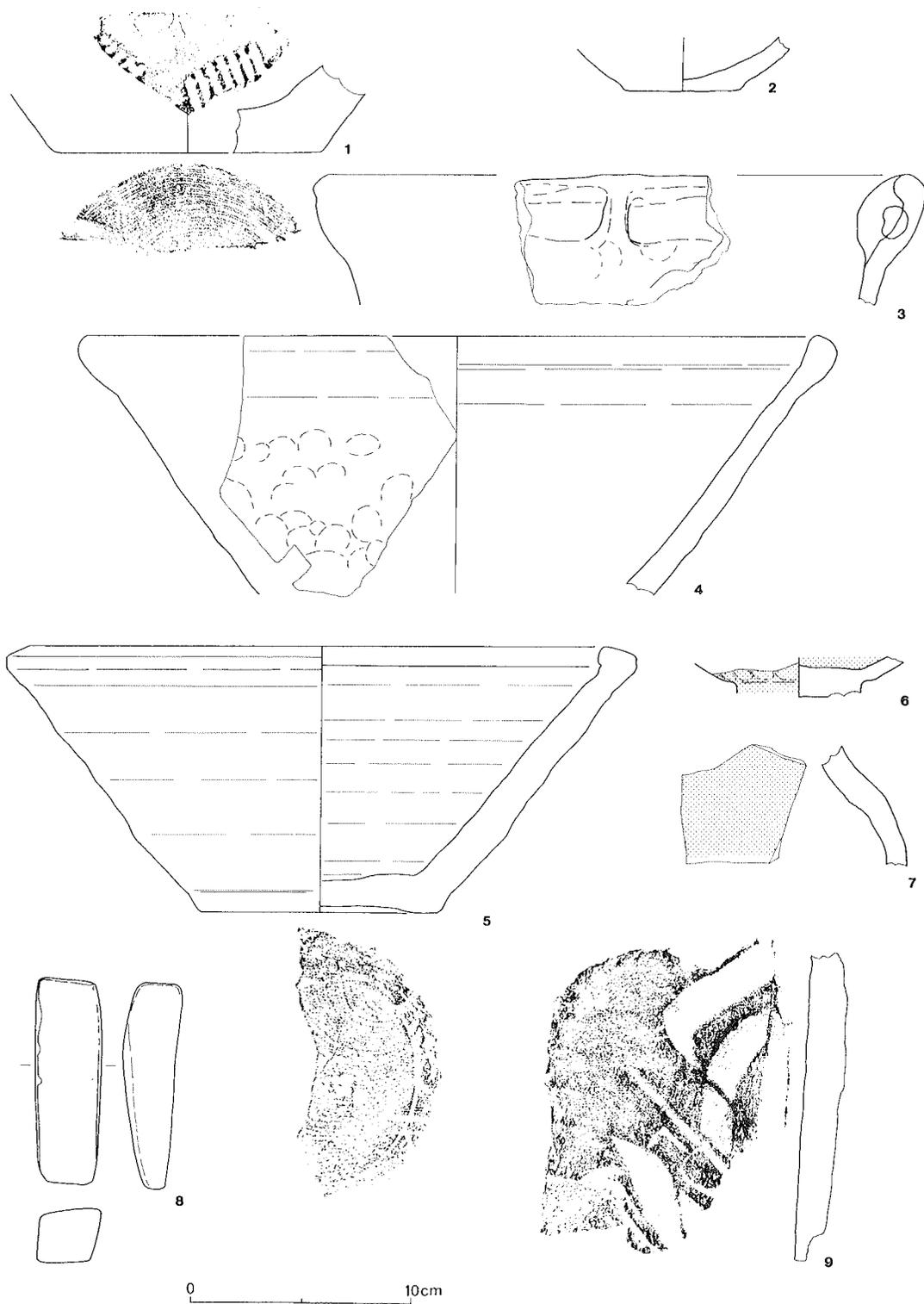
井戸跡出土遺物（第10図～第13図、第18図）

第10図1～9は、第1号井戸跡から出土した。1・2は土師器甕で、流入したものであろう。1は図示部分の約1/6残存、推定口径19.2cm、残存高15.8cmである。口唇部外面は平坦にナデられ沈線が巡る。器面の磨滅が激しく調整痕は不明だが、胴部外面は縦位のヘラ削りのようである。胎土やや粗、砂を含む。焼成やや不良、橙褐色～暗褐色を呈する。2は小破片である。推定口径19.6cm、口縁部は外反し、口唇部は丸い。外面はボロボロで調整不明瞭だが、縦位のヘラ削りであろう。内面は横位のヘラナデ。胎土やや粗、砂を含む。焼成やや不良、淡褐色を呈する。3は瓦質の鉢形土器の破片である。推定口径17.5cm、短い口縁部は直立し、口唇頂部は平坦にナデられている。頸部は屈曲して体部は丸い。器面は磨滅が激しい。胎土砂を含み、焼成やや不良、軟質で灰色を呈する。4は常滑焼の破片であるが、内面全面に緑灰色の灰釉が施されていることから鉢形を呈するものと思われる。貫入が認められる。推定底径18.0cm、やや扁平な形態を呈する。底は砂底で、底の縁辺の一部に、下面に砂が多く付着した共ドチが带状に貼り付いている。内面にも共ドチと思われる粘土粒が多く付着している。胎土微細、焼成は堅緻である。5は内耳鍋形土器の胴部であろう。ロクロ調整で、外面下位には指の押圧痕が認められる。胎土砂を含み、焼成良好、黒灰色を呈する。6は瀬戸美濃系の急須の底と思われる陶器片である。推定底径8.0cm。外面には灰釉、内面には緑色がかかった鉄釉が施されている。底は上げ底で、底面とその周縁部には施釉されていない。胎土は黄白色を呈しやや粗、焼成やや不良。7・8は土師質皿の底部である。7は底径6.8cm、8は底径6.5cm、いずれも回転糸切り痕を有し、胎土砂を含み、焼成良、淡褐色を呈する。9は土師質火鉢の破片である。推定口径32.8cm、器面は丁寧にナデられており、口唇頂部は特に平坦である。口縁部は胎土を2回積んで内側へせり出すように作られ、内面ではそれぞれの下端が下へナデつけられているのが明瞭に認められる。外面は刻印による16弁の菊花文が並ぶ。胎土砂及び小石を少量含み、焼成良好、灰色がかかった淡褐色を呈する。

第10図10・11、第11図1は第2号井戸跡より出土した。10・11は土師器甕で、流入したものであろう。10は底部で、推定底径8.0cm、内面はよくナデられている。胎土砂を含み、焼成良、外面黒色、内面淡褐色を呈する。11は球形に張った胴部の上半と思われる。外面は横位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデ。胎土砂を少量含み、焼成良好、淡褐色～暗褐色を呈する。1は瓦質の播鉢底部。



第10図 井戸跡出土遺物 (1) (1/3)



第11図 井戸跡出土遺物(2) (1/3)

推定底径6.0cm。胎土細、焼成良好、淡灰褐色を呈する。

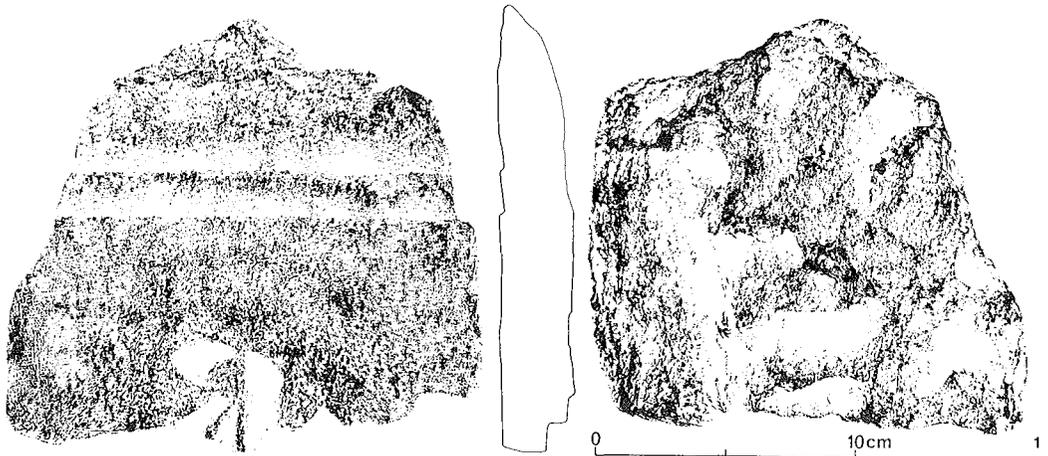
第11図2～9は第3号井戸跡から出土した。2は土師器甕の底部で、底面は削られている。推定底径5.0cm。胎土砂及び小石を含み、焼成良好、外面淡褐色、内面黒色を呈する。3は内耳のある鍋又は鉢形の土器の破片である。推定口径27.6cm。口縁部は内彎して開き、内側から強く押してナデられ、内耳の部分は薄くなっている。丸い口唇部は内側に肥厚している。胎土砂を含み、焼成良好、淡灰褐色を呈する。4・5は鉢形土器である。4は推定口径34.0cm、丸い口唇部はわずかに肥厚し、若干内曲する。ロクロ調整で、体部外面に指の押圧が加えられている。胎土砂・小石を含み、焼成良好、黒灰色を呈する。5は1/5ほど残存し、推定口径28.5cm、推定底径11.0cm、器高12.0cm。内曲した口唇部は上面が平坦にナデられている。ロクロ調整で、器面が磨滅しているためその他の調整は明瞭でない。底面は回転糸切りの後、周縁をへら状工具で削っている。胎土砂を含み、焼成良好、淡褐色を呈する。6は青磁皿の底部である。高台は欠損しているが、花皿状を呈するものと思われる。底面を除き、緑色を帯びた光沢のある青磁釉が施されている。胎土灰白色を呈し微細、焼成堅緻。7は常滑甕の破片である。外面には淡緑灰色の灰釉が施されている。内面はほとんど無調整のようである。胎土砂を少量含み、焼成良好。8は砥石である。長さ9.5cm、幅3.9cm、厚さ2.7cm。図の上面と下面がよく使用されている。軟質の凝灰岩。9は板石塔婆の破片である。薬研彫の主尊キリークの左下と蓮台が認められる。裏面は剝離している。緑泥片岩。

第12図1・第13図1～7は第4号井戸跡から出土した。第13図1は須恵質の甕形土器口縁部破片である。推定口径17.0cm。口縁部は短く外反し、口唇部は外面が直立気味にナデられてやや尖る。ロクロ調整。胎土小石を少量含み、焼成良好、淡灰色を呈する。2は瓦質の甕又は鉢形土器の口縁部破片である。推定口径11.4cm。口縁部はわずかに外傾し、口唇部上面は平坦になでられて器肉が内側へ少しはみ出す。屈曲した頸部直下の内面に指の押圧痕がある。胎土砂を含み、焼成良好、黒灰色を呈する。3・4は土師質皿である。3は口径11.1cm、底径7.0cm、器高2.4cm、胎土砂を含み、焼成良好。4は口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.1cmで若干扁平。胎土細、焼成良好。3・4ともに底面は回転糸切りで淡褐色を呈する。5は瀬戸・美濃系陶器の破片と思われる。外面には灰釉が施され、貫入が認められる。胎土灰白色を呈し微細、焼成堅緻。6は常滑焼の破片である。外面上位には緑灰色の灰釉が施される。下位にはクシ状工具による縦位の浅い調整痕が認められる。内面の調整は粗い。胎土微細、焼成堅緻。第12図1・第13図7は板石塔婆の破片である。第12図1は頂部の破片で、二条線と薬研彫の主尊キリークの上部がみられる。裏面にはノミ痕が浅く残っている。第13図7は薬研彫の主尊キリークの左半がみられる。裏面は剝離しているかもしれない。いずれも緑泥片岩。

第18図1～3の古銭は第4号井戸跡から出土した。いずれも腐食が激しい。1は行書の紹聖元宝（北宋、初鑄1094年）。2は判然としないが真書の慶元通宝（南宋、初鑄1195年）であろう。3は真書の政和通宝（北宋、初鑄1111年）。1（表）2（裏）3（裏）の状態ですべて3枚貼りついて出土した。

3. 溝状遺構

○第1号溝状遺構 調査区北西隅に位置する。幅約0.8m、深さ約60cmで、直角に曲がっている



第12図 井戸跡出土遺物(3) (1/3)

ように見えるが、土層の状態から南北方向の土壇に切られていたようである。瓦塔破片が出土した。第2次発掘調査ではこれに続く遺構は検出されていないため、溝状遺構ではない可能性もある。

○第2号溝状遺構 7-Bグリッドから調査区を縦断し、直角に折れて埋没谷へ向う、幅0.5～1.0m、深さ50～60cmの細い溝である。出土遺物から近世の排水路と思われる。

○第3号溝状遺構 昭和53年の第2次発掘調査で検出された溝状遺構に続くものである。2-Eグリッドから、4-Eグリッドで直角に曲り、3-Bグリッドに至っている。幅1.5～3.2m、深さ90cm以上でいわゆる箱築研状を呈する。3-Bグリッドに近づくほど広く深くなっており、3-Bグリッド付近では地下水の湧出のため、底が確認できなかった。

○第4号溝状遺構 3-Fグリッドで第2号溝状遺構に並行している幅0.5m、深さ約20cm、長さ約3mの小さい遺構である。出土遺物はない。

○第5号溝状遺構 4-Eグリッドで第3号溝状遺構から埋没谷へ向っている。幅約1.1m、深さ20～30cmほどで、出土遺物はないが、土層から第3号溝状遺構より新しいことが確認された。

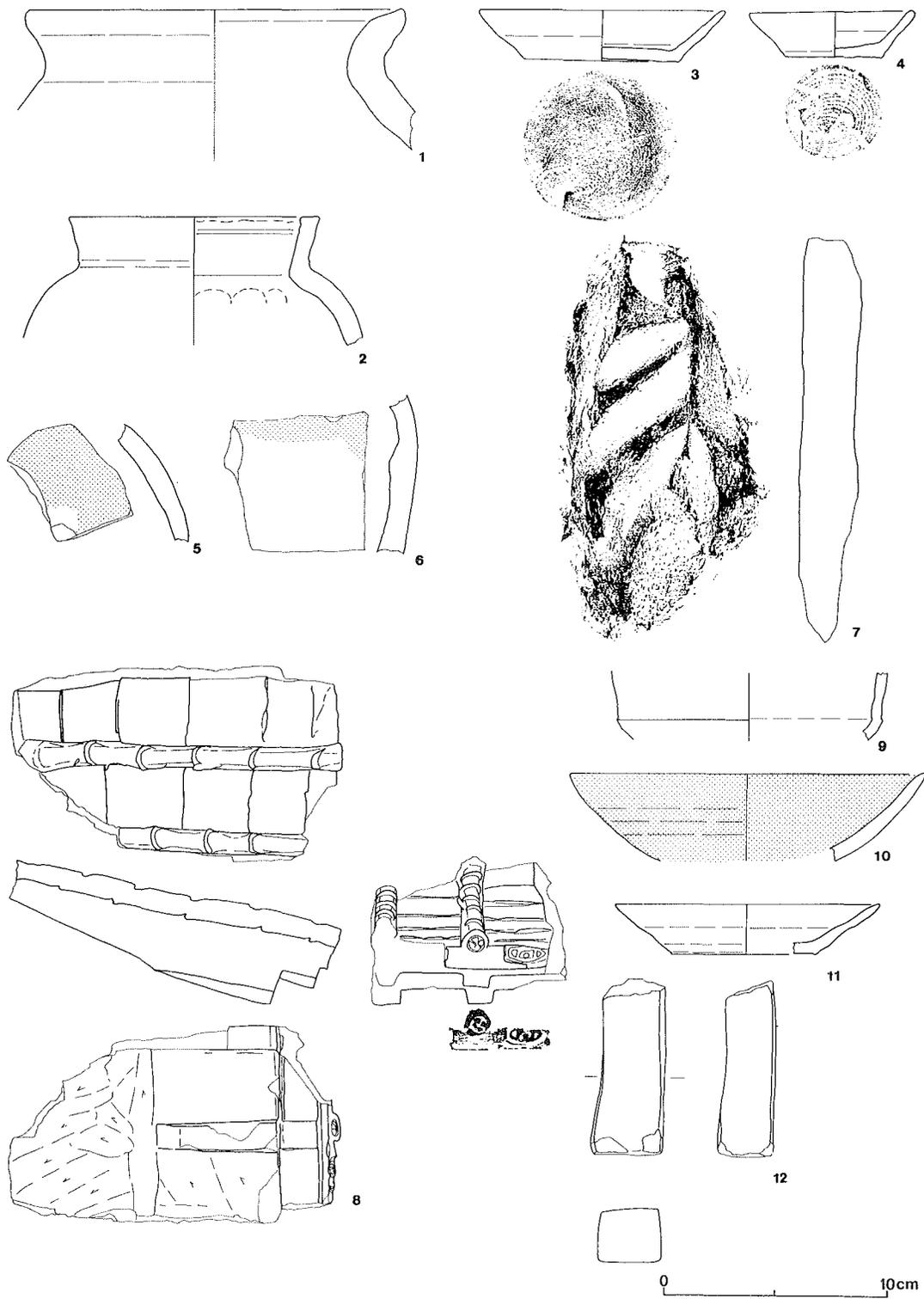
○第6号溝状遺構 7-Aグリッドから、第2号溝状遺構に切られ、第4号井戸跡・第7号溝状遺構を切って埋没谷へ向っている。幅0.8～1.3m、深さ10～30cmで、7-Bグリッドに段差があり、南西隅の方が深くなっていた。出土遺物はない。

○第7号溝状遺構 7-Cグリッドから、直角に折れて埋没谷へ向っている。幅1.2～2.2m、深さ50～60cmほどで、南端の方が細く浅い。砥石などが出土した。

○第8号溝状遺構 調査区南東隅に位置し、幅0.5m、深さ約20cmである。第10号・第11号土壇を切っている。古銭が出土した。

溝状遺構出土遺物(第13図～第16図、第17図1～3、第18図4～10)

第13図1は、第1号溝状遺構から出土した須恵質の瓦塔破片である。上面の平瓦の葺はへら状工具でナデつつ刻みを入れることで表現され、貼り付けられた丸瓦にも刻みが施されている。側面には軒丸瓦・軒平瓦の文様が刻印により施され、軒丸瓦は4弁の花文である。裏面には飛檐垂木・

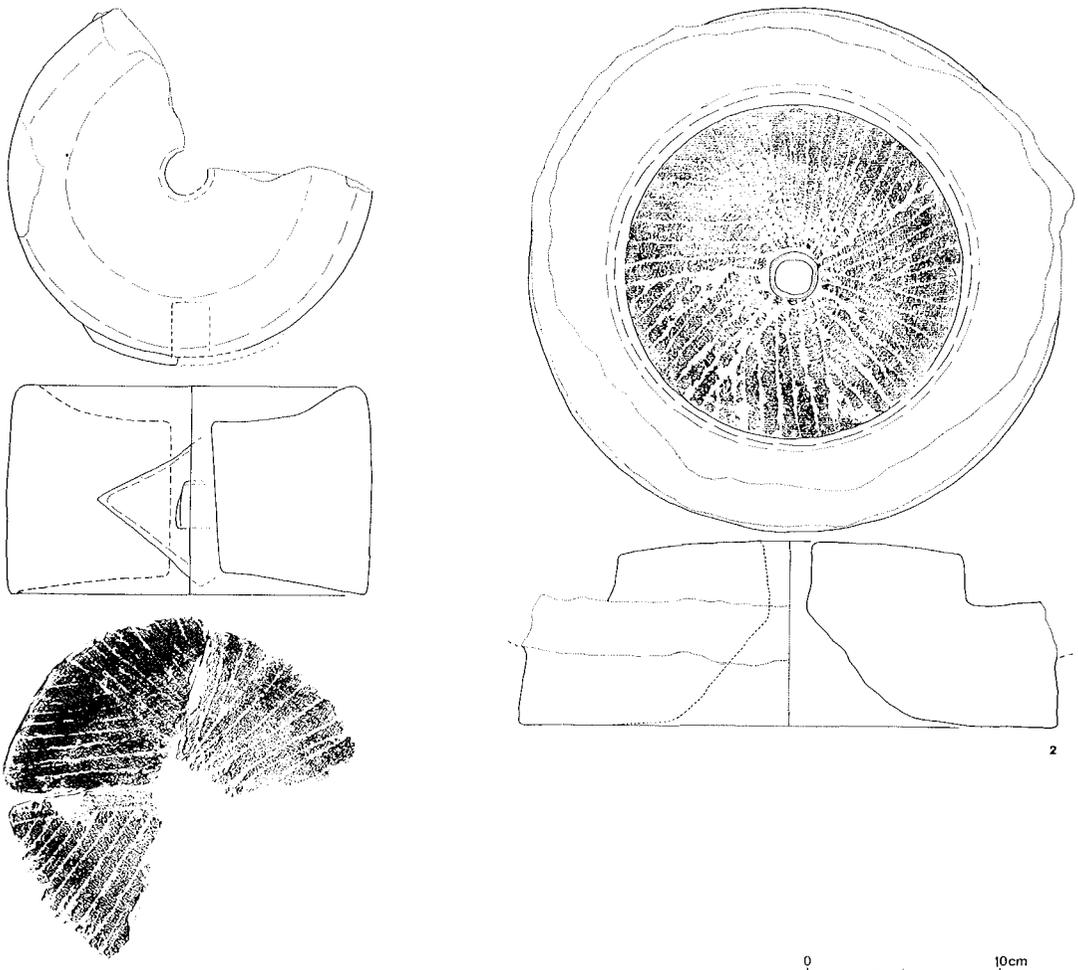


第13図 井戸跡出土遺物（4）・溝状遺構出土遺物（1）（1／3）

地垂木が貼り付けられて、平坦面はヘラ状工具で削って調整されている。胎土緻密、砂を少量含む。焼成堅緻、灰色を呈する。

第13図9～12は第2号溝状遺構から出土した。9は土師器坏の破片である。外面は磨滅しているが、内面は丁寧にナデられている。胎土細、焼成良好、橙褐色を呈する。10は皿形の灰釉陶器の破片である。推定口径16.0cm。内外面とも淡緑色の灰釉が施され、体部中位から下位にかけて気泡が多く認められる。貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し、焼成はあまり良くなく、軽質である。11は土師質皿の破片である。推定口径12.0cm、推定底径7.0cm、器高2.3cm。底面は回転糸切り。胎土細、焼成良好、淡褐色を呈する。12は砥石である。幅2.9～3.3cm、厚さ2.3～2.5cmで、一端を欠損している。上・下・側面の4面ともよく使用されている。軟質の凝灰岩。

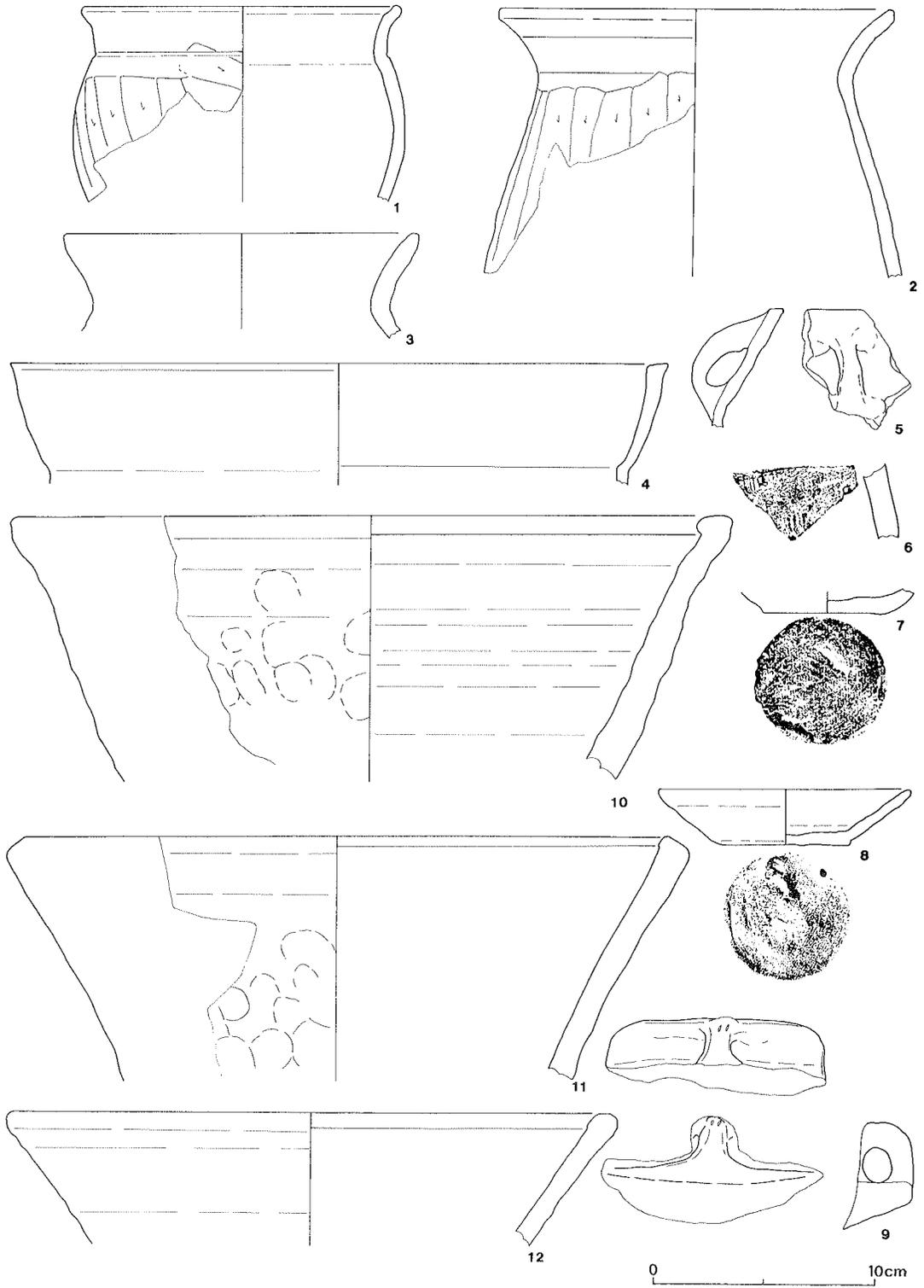
第14図の石臼（茶臼）は、3-Dグリッド、第2号溝状遺構の壁際から出土したもので、輝石安山岩製である。1の上臼は、径19.1cm、高さ11.1cm、芯棒孔径2.2～2.6cmで、約1/4を欠損し



第14図 溝状遺構出土遺物（2）（1/4）

ている。上面は皿状に窪み、よく磨かれている。側面には、右半を欠損しているが、握り手を差し込んだ方形の穴があり、その回りは菱形に浮彫りされていたようで、反対側にもその一部が認められる。下面は凹面で、目は6分画と思われ、副溝は10条前後のようである。2は下臼で、磨面の径17.8cm、底径28.0cm、高さ9.9cm、芯棒孔径2.0~2.8cm、受皿部を欠損している。目の主溝は7条確認でき、副溝は3~10条とバラつきが大きく、分画面の大きさも一定していない。芯棒孔は逆ロート状を呈し、底面の側には粗く20条近い縦の溝が彫られている。

第15図・第16図は第3号溝状遺構から出土した。第15図1は土師器小形甕の口縁部破片である。推定口径14.5cm。口唇部は内彎気味にふくらみ、口縁部は直立し、頸部外面に沈線状の爪痕が巡る。胎土砂を少量含み、焼成良、橙褐色を呈する。2・3は土師器甕の破片である。2は推定口径18.0cm。口縁部外反し、口唇部外面が平坦にナデられる。3は推定口径16.0cm。口縁部外反し、口唇部上面が若干平坦。2・3とも胎土砂を多く含み、焼成良、淡褐色を呈する。4・5は内耳鍋形土器の破片であろう。2は推定口径30.0cm。口縁部内彎気味に開き、口唇部上面が平坦にナデられ若干外側へ突出する。ロクロ調整。5は、口縁部内彎気味に開き、内耳は口唇部から頸部に橋状に貼り付けられている。外面は指の押圧痕が明瞭。4・5とも胎土砂を少量含み、焼成良好、淡褐色を呈する。6は常滑焼甕の破片であろう。外面は叩き目が認められる。内面は緑灰色の自然釉が認められる。胎土緻密、焼成良好。7・8は土師質皿である。7は底径5.8cm、底面は回転糸切り後若干ナデられているようである。胎土砂を含み焼成良、外面淡褐色、内面灰褐色を呈する。8は口径11.6cm、底径5.8cm、器高2.5cm、4/5ほど残存。底面は回転糸切り、内面底は凹凸が激しい。胎土小石を少量含み、焼成良好、淡褐色を呈する。9は土器の外側につけられた耳と思われる。長さ約10cm幅2.2cmの棚状の部分を外面に貼り付け、その中央から本体（おそらく口縁部）に橋状の耳を貼り付けている。胎土砂を含み、焼成良、やや軽質で黒灰色を呈する。第15図10~12、第16図3は鉢形土器の破片である。10は推定口径33.0cm、口縁部がわずかに外反し、内曲する口唇部は上面と外面が平坦にナデられている。ロクロ調整で、外面には指の押圧痕が明瞭。外面下位は斑点状の剝離が激しく、外面中位~下位は炭化物が顕著に付着。胎土砂を含み、焼成良、外面淡褐色、内面灰褐色を呈する。11は推定口径31.0cm。口唇部が一部外側へ彎曲しており、片口がついていたものと思われる。口唇部は外面が平坦にナデられ、わずかに内側へ突出する。ロクロ調整で、外面には指の押圧痕が明瞭。胎土砂を含み、焼成良、淡褐色を呈する。12は推定口径28.0cm。若干内側へ肥厚する口唇部は、上面が平坦に、外面が丸くナデられている。ロクロ調整で外面は剝離が激しい。胎土砂を含み、焼成良、黒灰褐色を呈する。第16図3は推定口径34.0cm。内曲する口唇部は上面が平坦にナデられている。ロクロ調整。胎土砂を含み、焼成良、淡褐色を呈する。第16図1は瓦質の大形の鉢であろう。口唇部は丸く、外面がやや平坦にナデられている。ロクロ調整だが、調整は全体に粗い。胎土砂を含み、焼成良、灰白色を呈する。2は焙烙の破片である。推定口径46.0cm、推定底径40.5cm、器高5.4cm。体部は外傾し、平坦にナデられた口唇部は若干内側を向く。ロクロ調整で、底面及び底面の脇は削られている。内耳の有無は不明。胎土砂を含み、焼成良、黒灰褐色を呈する。4は須恵質土器の底部である。底面直上に沈線が巡る。外面は横位に削られている。底面は回転糸切り。胎土砂を少量含み、焼成良、灰白色を呈する。5は用途不明の石製品である。径10



第15図 溝状遺構出土遺物（3）（1／3）

cm厚さ5.5cmほどの円形の石の中央に播鉢状の窪みが施されている。外面の一部は削って調整されたことが明瞭。軽質の角閃石安山岩。6・7は板石塔婆の破片である。6は正面は完全に剝離しているが、裏面は横位のノミ痕が明瞭。7は正面に八月十日の日付けと花瓶・棹線の下辺がみられる。裏面は剝離しているかもしれない。6・7とも緑泥片岩。

第17図1～3は第7号溝状遺構から出土した。1は土師器壺の口縁部である。推定口径17.0cm。口唇部外面は平坦にナデられている。内外面とも剝離が激しいが、外面はハケ目調整の後横ナデである。胎土砂を含み、焼成良、橙褐色を呈する。2は瀬戸・美濃系の灯明皿であろう。小破片で推定口径11.5cm。口唇は丸く、体部内面中位に突堤が貼り付けられている。外面口縁部及び内面に褐色の鉄釉が施され、外面は体部へ少し流れている。体部外面及び突堤の先端の釉はごく薄い。胎土淡黄灰色を呈し、焼成良好。3は砥石である。残存長6.9cm、残存幅3.8cm。図の右上面がやや彎曲して、下面が水平にともによく使用されているため、断面は三角形に近い。軟質の凝灰岩。

第18図4・5は第2号溝状遺構から出土した古銭である。腐食が激しく銭文は不明瞭だが、2枚とも寛永通宝であろう。

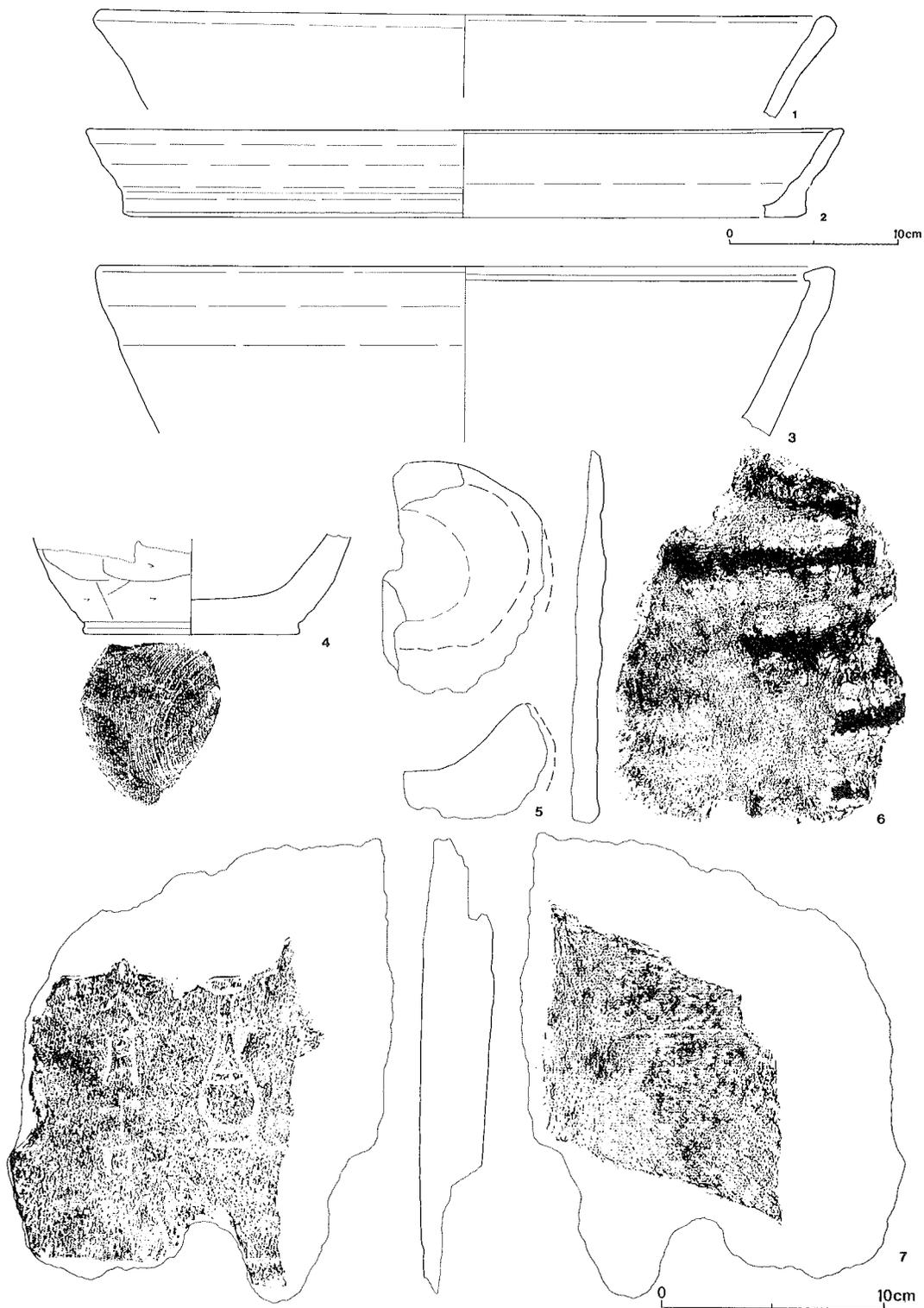
第18図6～10は第8号溝状遺構から出土した古銭である。6は隸書の元豊通宝（北宋、初銭1078年）である。7・8は腐食のため不明瞭だが、7は篆書の至和元宝（北宋、初鑄1054年）、8は篆書の熙寧元宝（北宋、初鑄1068年）であろう。9は真書の皇宋通宝（北宋、初鑄1039年）、10は真書の淳熙元宝（南宋、初鑄1174年）である。6(表)7(裏)8(表)の状態で3枚貼りついて、9、10は単独で出土した。

4. 埋没谷

昭和53年の第2次発掘調査の際に、今回の調査区の東側に、北北東へ延びる埋没谷があることが確認されており、現地形でも若干低くなっている。この辺りは、ししの水浴び、と呼ばれており、地下水が湧出しやすかったものと思われる。今回はトレンチを2本設定して調査を行った。西側の遺構確認面から約1m緩やかに下り、低面には凹凸が認められた。

埋没谷トレンチ出土遺物（第17図4～11）

4～9は第1トレンチより出土した。4は土師器高坏の接合部である。内面は剝離しているようである。脚部内面頂部に小さな突起があり、その周囲に絞り目が認められる。胎土砂を少量含み、焼成良、淡橙色を呈する。5は円筒埴輪の底部破片である。表面は磨滅のため不明瞭だが、外面には7～8本/1cmのハケ目が縦に施され、内面はナデ及び押圧で調整されている。下端は丁寧にナデられて平坦になっている。胎土砂を含み、焼成やや不良、黄白色を呈する。6・7は土師質皿の底部である。ともに底面回転糸切り。6は底径3.8cm、底面直上に沈線が巡る。胎土砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。7は底径5.6cm、灯明皿として利用されたものと思われ、内面に油煙が付着している。胎土やや粗、砂を含み、焼成良、やや軽質で淡黄灰色を呈する。8は内耳鍋形土器である。推定口径29.5cm。口縁部は内彎気味に開き、口唇部は平坦にナデられ、若干内側を向く。体部はほぼ直立。体部外面は全体に指の押圧痕がみられ、下位は横に削られている。内耳は口唇部



第16図 溝状遺構出土遺物(4) (1/4・1/3)



第17図 溝状遺構出土遺物 (5)・埋没谷出土遺物 (1) (1/3)

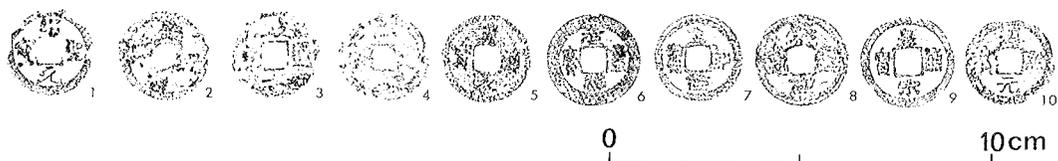
から頸部に橋状に貼り付けられ、口縁部の内耳部分は内側からの押圧により若干外側へふくらんでいる。胎土砂を含み、焼成良、灰褐色を呈する。9は須恵器壺の口縁部破片と思われる。推定口径27.0cm。口唇部は外面が平坦にナデられ、内外面に若干突出している。ロクロ調整だが、外面には指の押圧のような凹凸がある。胎土砂を少量含み、焼成良好、灰色を呈する。

10・11は第2トレンチより出土した。10は土師器碗の口縁部破片である。推定口径16.0cm、口縁部は短く外傾し、口唇部はやや尖っている。頸部は外側から強く押えられ、体部は横位に削られている。胎土砂を含み、焼成良、橙褐色を呈する。11は土師質の擂鉢の底部破片である。推定底径12.5cm。かなり厚く、外面は若干の指の押圧の他はあまり調整されていないが、体部上位はよくナデられていたようである。内面は丁寧にナデられており、かなり間隔を置いて櫛目が施されている。底面はナデられている。胎土やや粗、砂を含み、焼成良好、淡褐色を呈する。

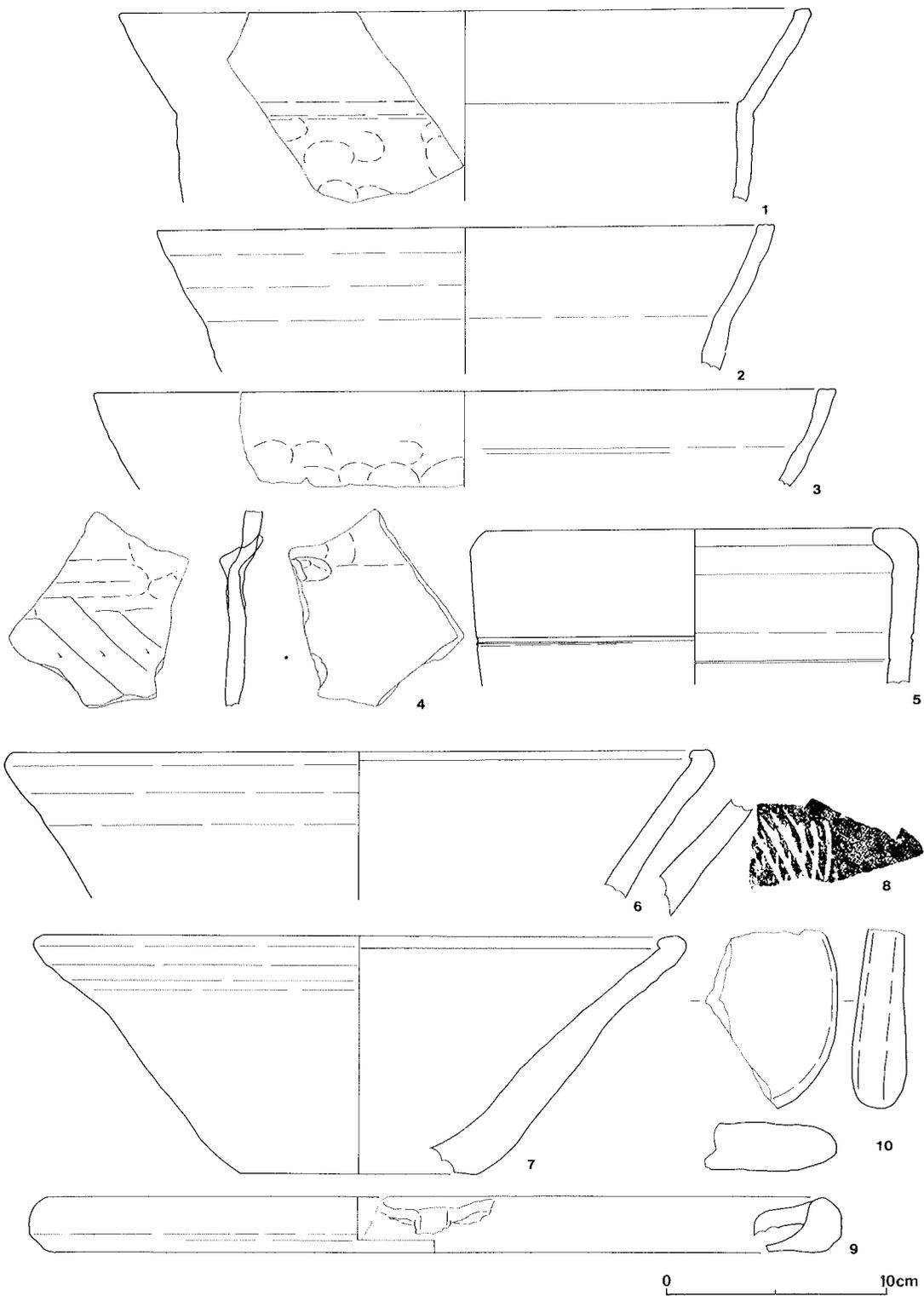
5. 表面採集遺物（第19図、第21図1～3）

第19図、第21図1～3は、表面採集遺物及び攪乱土中から出土した遺物などである。

1・2・4は鍋形土器の破片である。内耳がつくものである。1は推定口径31.6cm、口縁部は外傾し、口唇部上面は平坦にナデられている。ロクロ調整で、体部外面には指の押圧痕が明瞭。2は推定口径28.0cm。口縁部は内彎気味に開き、口唇部上面は平坦にナデられている。体部はやや外傾していたものと思われ、外面には炭化物が付着、内面は剝離が激しい。1・2ともに胎土砂を含み、焼成良好、黒灰色を呈する。4は頸部から胴部にかけての破片で、頸部内面の突起は内耳の一部であろう。体部外面は斜めのヘラ削り。胎土砂を少量含み、焼成良、淡褐色を呈する。3は焙烙の体部破片であろう。推定口径34.0cm。内彎気味に外傾し、口唇部上面が平坦にナデられる。ロクロ調整で、外面下位に指の押圧痕が明瞭。外面には炭化物が付着。胎土砂を含み、焼成良、暗灰褐色を呈する。5は筒形の体部を有する土師質の鉢形土器であろう。推定口径17.0cm。内曲する口唇部は上面が平坦で内側が強くナデられ直下に稜をつくる。沈線が巡り、沈線の上は器面の調整が粗いが、沈線の下は光沢を帯びるほどに磨かれている。胎土やや粗、砂を少量含み、焼成良、暗褐色を呈する。6・7は土師質の鉢形土器の破片である。いずれもロクロ調整で、内曲する口唇部の上面が平坦にナデられ、胎土砂を含み、焼成良。6は推定口径28.0cm、器面は剝離が激しい。淡褐色を呈する。7は推定口径30.0cm、内面の剝離が激しい。黒灰褐色を呈する。8は土師質の擂鉢の破片である。内面に太く深い櫛目が施されている。胎土やや粗、砂を含む。焼成良、橙褐色を呈する。9は内耳焙烙の破片である。推定径35.5cm強、器高2.5cm。浅く厚い体部は内彎気味で、外面下端は強くナデられている。底部は薄く、底面は若干削られていたようである。やや長い内耳は底部へ

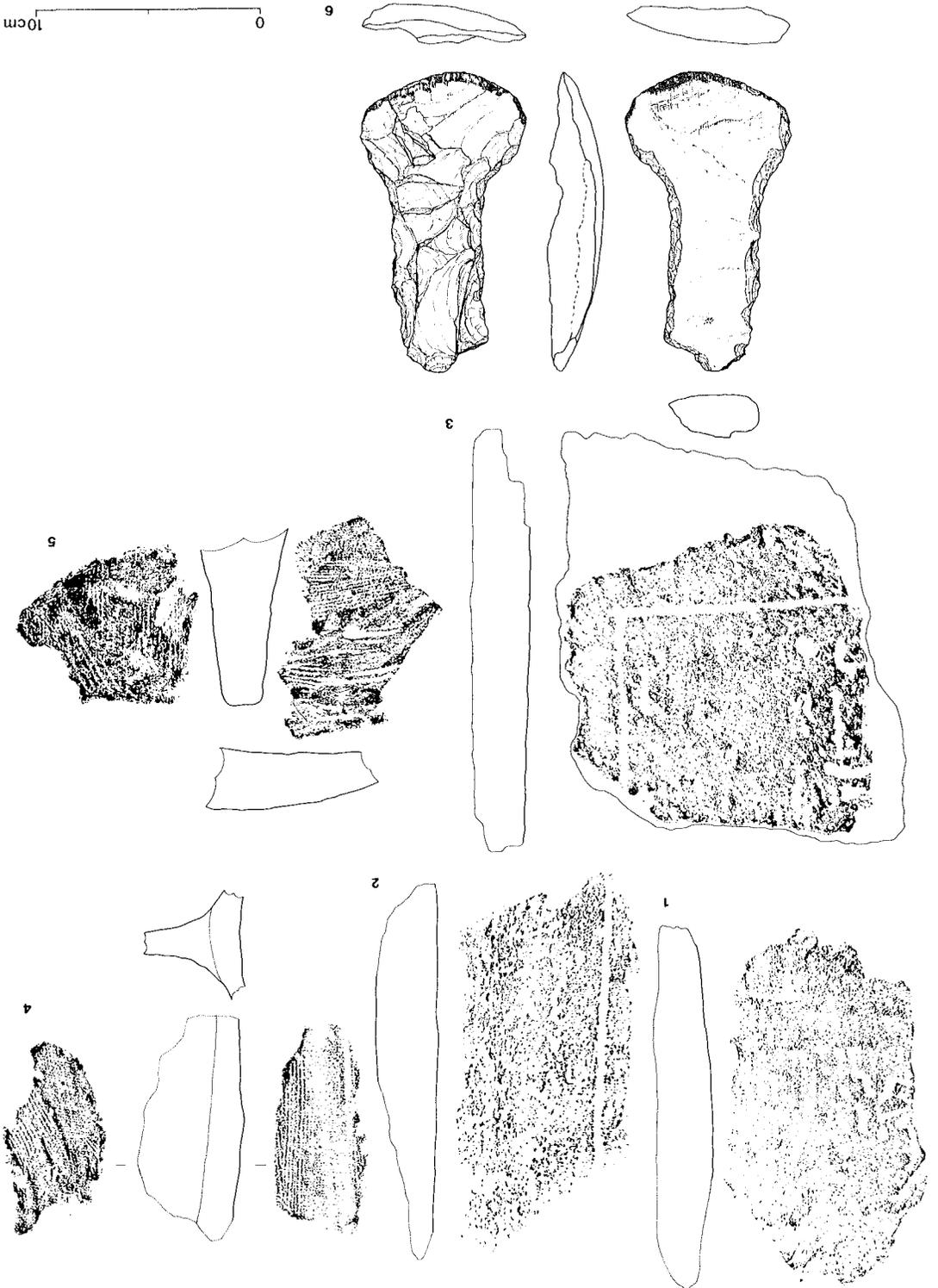


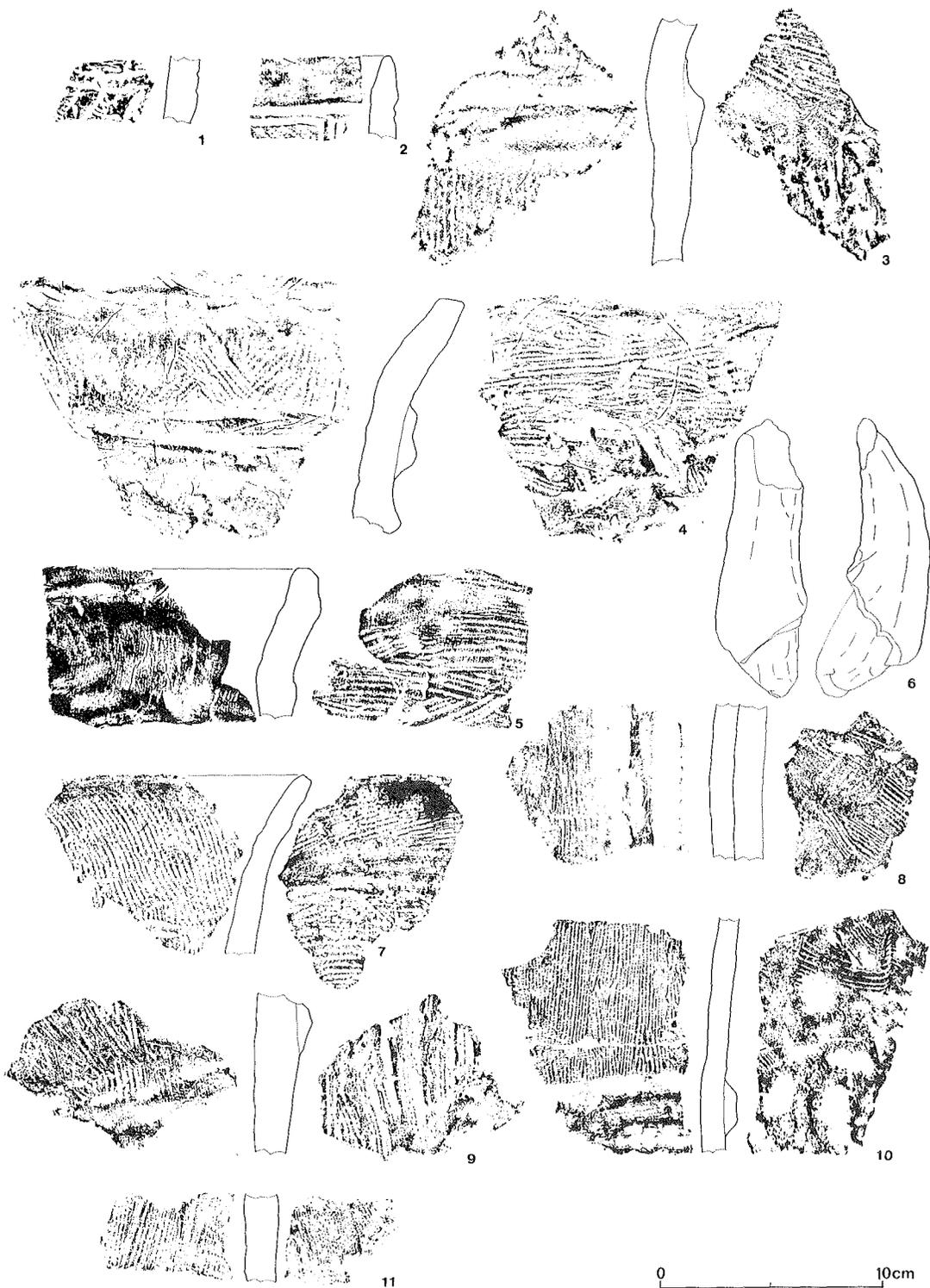
第18図 井戸跡及び溝状遺構出土古銭（1／2）



第19図 表面採集遺物 (1 / 3)

第20图 板石塔婆·埴輪·石斧 (1/3)





第21図 縄文土器及び埴輪 (1/3)

橋状に貼り付けられていたものであろう。胎土細、焼成良好、外面黒褐色、内面淡橙褐色を呈する。10は磨石状の石製品である。残存長8.3cm、厚さ2.5cm。図上面に磨痕がみられる。角閃石安山岩。第20図1～3は板石塔婆の破片である。いずれも緑泥片岩で、裏面は剝離。1は小形のものと思われ、中央に小さいキリークがみられる。2は側辺の一部で、枠線と文字がみられるが、磨滅のため解読できない。側面は裏へ傾斜している。3は枠線の左下がみられ、中央の文字は二月日であろう。

6. 縄文土器、石器、埴輪（第20図4～6、第21図）

埋没谷出土以外の縄文土器片、石器、埴輪片を一括した。第21図3は第2号溝状遺構、第21図4・5・7～9は第3号溝状遺構、第21図6は第3号井戸跡、第21図7は第4号井戸跡から出土した。その他は表面採集及び攪乱土中からの出土である。

第21図1・2は縄文土器片である。1は竹管状工具と浮線文により文様が描かれる。胎土砂を含み、焼成良、淡褐色を呈する。2は口唇部が無文で、沈線が文様帯を画し、沈線による区画内にL無節の縄文が施される。胎土砂を含み、焼成良、暗褐色を呈する。

第20図6は打製石斧である。長さ13.7cm、刃幅7.4cm、厚さ2.5cm、重さ218g。周縁部には細かい調整剝離が施され、背面は原礫面を利用している。正面中位のやや下は、あたかも柄に装着することを意識するかのように横位に打ち欠かされている。刃部は若干磨耗しており、正背面とも細かい擦傷状の使用痕が認められる。ホルンフェルス。

第20図4・5、第21図6・8は形象埴輪の破片であろう。1cmあたりのハケ目の本数は、第20図4が6本、5が5～7本、第21図8が5～7本である。第20図4は靱形埴輪の鱗と思われる。円筒に板状部分が貼り付けられている。第20図5は形状、部位不明。一枚の粘土板を折り返して作られている。4・5とも焼成良、黄白色を呈する。第21図6は人物埴輪の腕であろう。先端は欠損しており、付け根ははめ込みになっていたようである。表面は縦に丁寧にナデられているが、内側はやや粗い。第21図8は、断面山形の突帯が縦に貼り付けられている。6・8とも焼成良、橙褐色。

第21図3～5・7・9～11は円筒埴輪の破片である。うち4・5・7は口縁部である。1cmあたりのハケ目の本数は、3・7は4本、4・5は3～4本、9・10は5～6本、11は7～8本である。3・4の下端に透し孔の一部が認められる。3・4のタガは歪んでいるが、10は整っている。焼成は、3はやや不良、10は良好、他は良。色調は、3・4・9は橙褐色、5・10は橙色、7は暗褐色、11は赤褐色。

V. 結 語

割山遺跡は、以前から埴輪窯跡が存在することで著名であったが、昭和53年度の第2次発掘調査（註）により、埴輪窯跡と浅い谷を隔てた西側のB区には、館の堀跡と考えられる溝状遺構が検出された。今回の第4次発掘調査の対象地は第2次発掘調査B区に南接し、検出された遺構は土壇・

井戸跡・溝状遺構などで、第2次発掘調査B区とほぼ同様である。

古墳時代の遺構は、土師器甕が出土した第1号土塚のみである。土塚全体は確認できなかったが、底面や壁の状況などから住居跡とは考え難い。出土した土師器甕は6世紀中頃のものと考えられ、埴輪製作工人たちが使用したものと推定できる。

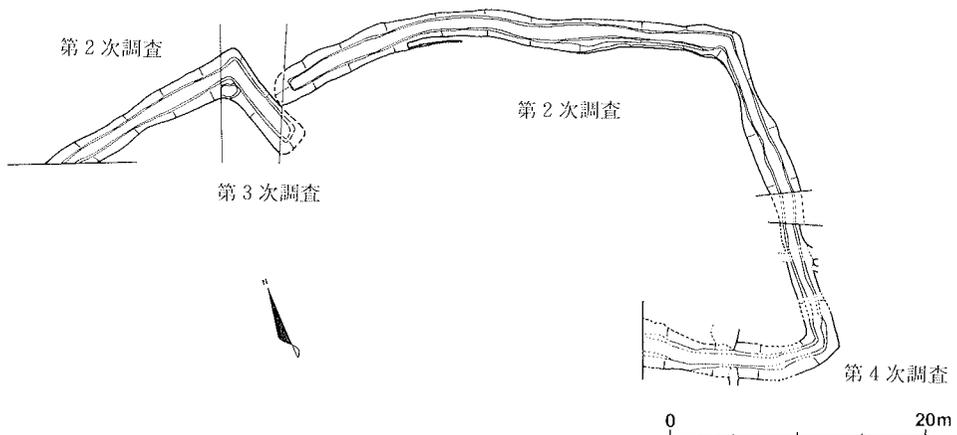
第3号溝状遺構は、第2次発掘調査で検出された溝状遺構の続きである。昭和55年度の第3次発掘調査では、館の堀跡という推定に疑問が生じた（註）が、今回の調査で平面形はやや歪んだ形ながらも方形を呈するようであり、断定はできないが堀跡である可能性が高まったといえよう。溝状遺構の内側は攪乱が激しく、建物跡などは確認できなかったが、常滑・青磁・板石塔婆の破片などの出土遺物も有力者の存在を物語るものと考えられ、この溝状遺構が13世紀末～14世紀初頭頃までに構築されたとする従来の見解を裏付けるものといえよう。なお、西接する鼠裏遺跡C区（註）では、13世紀末と推定される常滑片や、乾元2年（1303）銘のある板石塔婆などが出土している。

他に注目される遺物としては、第13図8の須恵質の瓦塔破片が挙げられる。瓦塔の破片は、埋没谷の第1トレンチからも2点出土しているが、表面の剝離が激しいこともあって図示できなかった。古銭は、寛永通宝を除くと北宋銭と南宋銭で、鼠裏遺跡C区と類似した内容である。

深谷市の歴史を紐解くと、14世紀末頃に深谷上杉氏の祖、上杉憲英が疋鼻和（現在の国濟寺）に城を構えたとされている。上杉憲英の疋鼻和築城は深谷市の歴史において重要な意義をもっている。その直前に、大字上野台字割山の地に豪族の館があった可能性のあることは特に注目すべきである。割山遺跡は、埴輪窯跡の存在とともに、中世館跡の可能性のある遺跡としても重要な遺跡であることを、今後とも充分留意しなければならない。

末筆ながら、今回の調査を快く承諾され、終始調査に御協力下さった土地所有者の今井昭二氏に厚く御礼申し上げたい。

註 1 ページを参照されたい。



第22図 溝状遺構位置関係図

写 真 图 版



1. 調査区全景 (南より)



2. 調査区全景 (南西より)

図版 2



3. 調査風景（北西より）



4. 第3号溝状遺構・第3号井戸跡土層



5. 第4号井戸跡



P 1

M 1

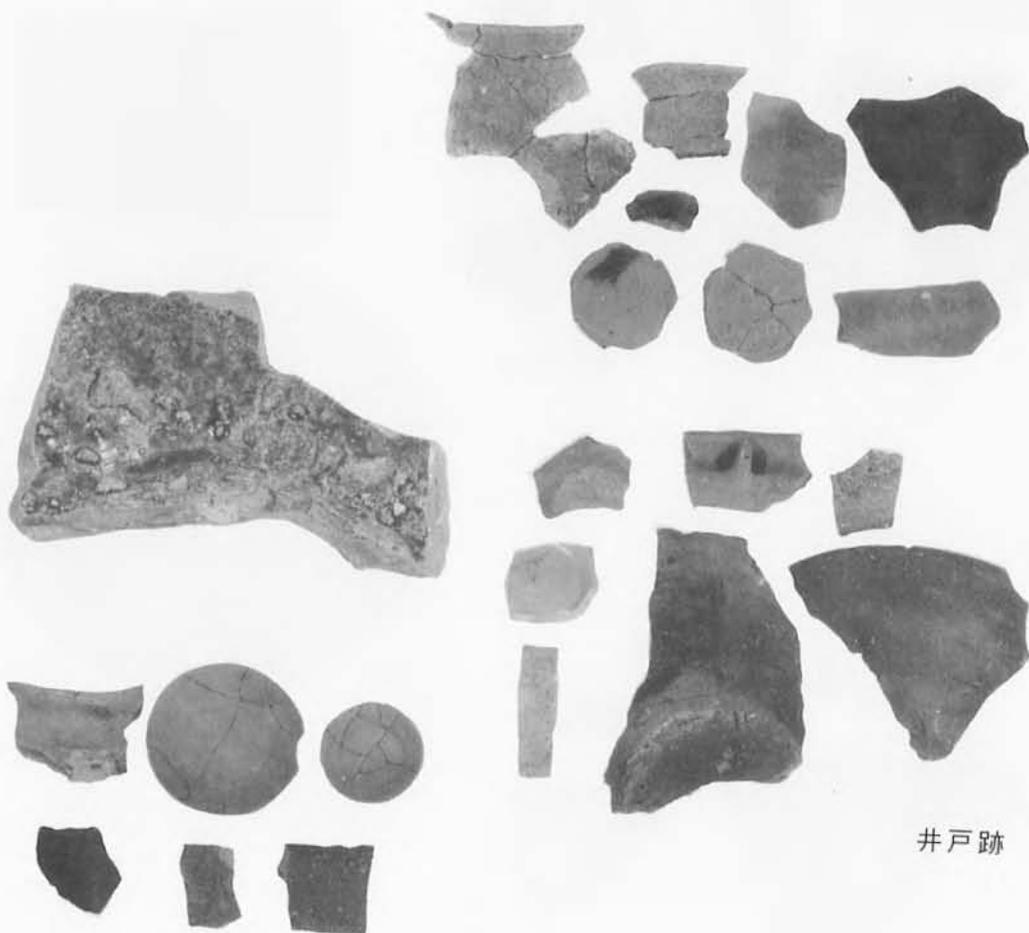


6. 遺物出土状態

図版 4

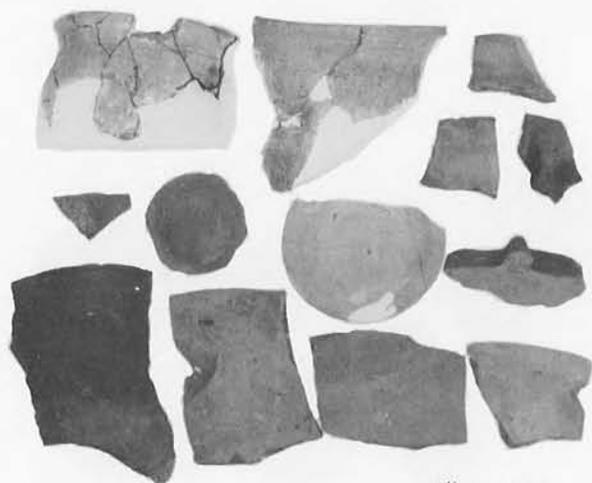


土埴



井戸跡

7. 出土遺物 (1)



溝状遺構



埋没谷

8. 出土遺物 (2)

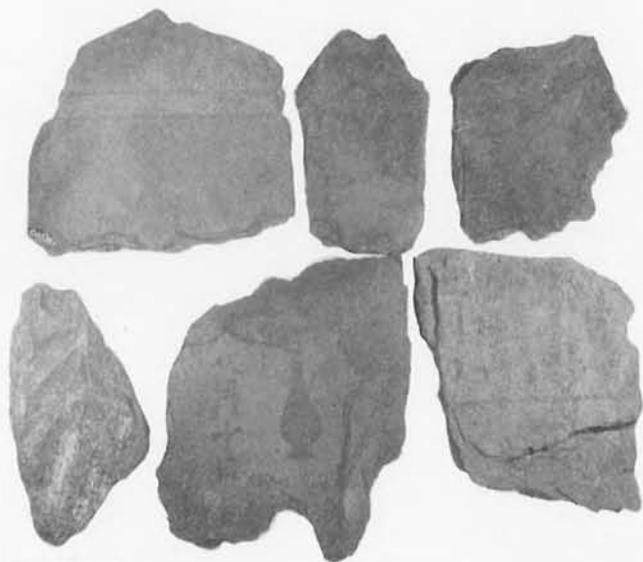
図版 6



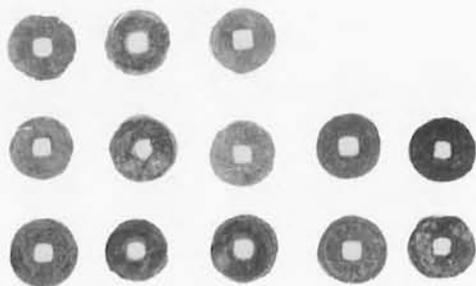
打製石斧



縄文土器・埴輪



板石塔婆



古銭

追 記

発掘中、耕作等による攪乱が激しかったため、遺構番号に混乱をきたした。そこで発掘終了後、遺構番号を整理し直し、新たな番号を付した。出土遺物の注記等は旧番号によっているので、新旧の遺構番号の対照表を付しておきたい。

新	旧
P 1	P 2
2	13
3	12
4	14
5	18
6	17
8	19
9	22
10	20
11	21

新	旧
W 1	P 2
2	W 2
3	P 11
4	P 15

新	旧
M 1	M 1
2	M 2
3	M 3、M 4、P 9
4	M 4
5	M 5
6	M 8、M 10、P 16
7	M 7、M 9
8	M 12

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

割 山 遺 跡 (第4次)

印刷 昭和60年3月21日

発行 昭和60年3月30日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会

印 刷 博 文 社
